

2023 春

# 超短期派遣プログラム報告書



編集者：報告書エディター

派遣先：オーストラリア・メルボルン

派遣期間：2023年3月2日～3月12日

## 目次

1.	海外派遣プログラムの目的.....	3
2.	参加学生の紹介と研修日程.....	4
2-1	派遣プログラムの日程.....	4
2-2	参加学生の紹介.....	5
3.	オーストラリア全体の概要.....	6
3-1	基礎情報.....	6
(1)	正式名称.....	6
(2)	面積・人口・時差.....	6
(3)	言語・宗教・民族.....	7
(4)	州・都市.....	8
(5)	通貨.....	9
(6)	祝祭日・イベント.....	10
(7)	気温・降水量・四季.....	12
(8)	世界遺産.....	13
(9)	動物.....	15
3-2	歴史.....	17
(1)	人類の進出.....	17
(2)	植民地時代.....	17
(3)	オーストラリア連邦の成立と世界大戦.....	18
(4)	白豪主義の撤廃.....	18
3-3	オーストラリアの人物.....	19
(1)	ダグラス・モーソン.....	19
(2)	ハワード・フローリー.....	19
(3)	フランク・マクファーレン・バーネット.....	20
4.	メルボルンの概要.....	21
4-1	基礎情報.....	21
(1)	地理・人口.....	21
(2)	気候.....	22
(3)	産業、経済.....	22
(4)	治安.....	22
(5)	文化.....	22
(6)	商業.....	23
4-2	歴史.....	26
(1)	メルボルンの歴史.....	26

(2) メルボルンの歴史的な建造物 .....	26
4-3 メルボルンに由来する人物 .....	29
(1) Cate Blanchett (1969年5月14日～) .....	29
(2) Lisa Gerrard (1961年4月12日～) .....	29
(3) John Malcom Fraser (1930年5月21日～2015年3月20日) .....	29
5. メルボルン大学について .....	31
5-1 キャンパス概要 .....	31
5-2 講義概要 .....	32
5-3 研究室訪問 Lab tour .....	35
5-4 その他 .....	37
(1) Tokyo Tech Information Session について .....	37
(2) 学生との交流について .....	39
6. その他 .....	40
6-1 メルボルンの街の様子 .....	40
(1) 街の様子 .....	40
(2) ترامの様子 .....	41
6-2 メルボルンの食事 .....	42
(1) 朝食 .....	42
(2) 昼食・夕食 .....	44
(3) カフェ .....	47
6-3 メルボルンのお土産 .....	48
7. 所感 .....	51
8. 資料 .....	60
図表索引 .....	60

## 1. 海外派遣プログラムの目的

本プログラムは、グローバル理工人育成コースの下記4つのプログラムのうち、4) 実践型海外派遣プログラムの一環として実施される。

なお、本学における「グローバル理工人」とは、「世界の企業、大学、研究所、国際機関など、様々な分野で活躍できる科学者・エンジニア・技術者」のことを指す。

### 1) 国際意識醸成プログラム

：国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな活躍への意欲を養う

### 2) 英語力・コミュニケーション力強化プログラム

：海外の大学などで勉学するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う

### 3) 科学技術を用いた国際協力実践プログラム

：国や文化の違いを越えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつつ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う

### 4) 実践型海外派遣プログラム

：自らの専門性を基礎として、海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う

グローバル理工人育成コースにおける4)の実践型海外派遣プログラムのねらいは、学生を海外に派遣し、現在まで育成された能力を活用し、自身の今後の研究やキャリア形成の参考となるような経験を積むことである。

<参考>実践型海外派遣プログラムは、以下の5能力の育成を目指すものである。

1) 自らの専門性を基礎として、異なる環境において生活し、業務を遂行する能力

2) 窮地を乗り越えるための判断力・危機管理能力など、自らの意思による行動に必要な能力

3) 異文化理解を進め、相手の考えを理解して自分の考えを説明するためのコミュニケーション能力・語学力・表現力

4) 海外の様々な場において、実践的技量と科学技術者としての倫理を身につけ、チームワークと協調性を発揮し、課題発見・問題解決を行うための能力

5) 新興国における科学技術分野で活躍するための基礎的な能力

## 2. 参加学生の紹介と研修日程

### 2-1 派遣プログラムの日程

#### 派遣プログラム日程

日付	行動	内容	備考
3月1日(水)	成田発	18:35 成田空港発(JAL773便)	
3月2日(木)	メルボルン着 ホテルに移動 市街散策	6:35 メルボルン空港着 空港からスカイバスで移動 トラムの乗り方の説明、CBDの散策	ホテル(Batman's Hill on Collins)
3月3日(金)	メルボルン大学訪問	10:30- Welcome Session 11:00- キャンパスツアー 大学周辺案内	メルボルン、メルボルン大学の紹介 戦争慰霊館、ロイヤル植物園、フリンダースストリート駅等
3月4日(土)	メルボルン郊外散策	フィリップ島	バスでのツアー
3月5日(日)		グレートオーシャンロード	
3月6日(月)	メルボルン大学訪問	講義受講 12:00- NIMS Lab Tour	
3月7日(火)		講義受講	
3月8日(水)		講義受講 14:00- Teaching Lab Tour	
3月9日(木)		講義受講 13:00-14:00 Tokyo Tech Information Session	
3月10日(金)		講義受講 13:30- CAREN Lab Tour 14:00- Japanese Kaiwa Club	
3月11日(土)		市街散策	各自
3月12日(日)	メルボルン発-成田着	8:05 メルボルン空港発(JAL774便) 16:05 成田空港着	

## 2-2 参加学生の紹介



図 1 戦争慰霊館前にて

### 参加学生

所属	学年	役割	
融合理工学系	2	現地発表エディター	前列一番右
システム制御系	2	報告会エディター	前列右から2番目
融合理工学系	2	サブリーダー	後列右から3番目
情報工学系	2	報告書エディター	前列左から2番目
生命理工学系	2	HPレポート記事執筆者	前列一番左
システム制御系	3	リーダー	後列一番右
生命理工学系	3	報告書エディター	後列一番左
生命理工学系	3	報告会エディター	後列左から3番目
材料系	4	撮影係	前列左から3番目
材料系	4	現地発表エディター	後列右から2番目
システム制御系	4	撮影係	後列左から2番目
建築学系都市・環境学コース	M2	交通係・会計係	前列右から3番目

### 3. オーストラリア全体の概要

#### 3-1 基礎情報

##### (1) 正式名称

正式名称：オーストラリア連邦（Commonwealth of Australia）

国旗は図 1 に示す。

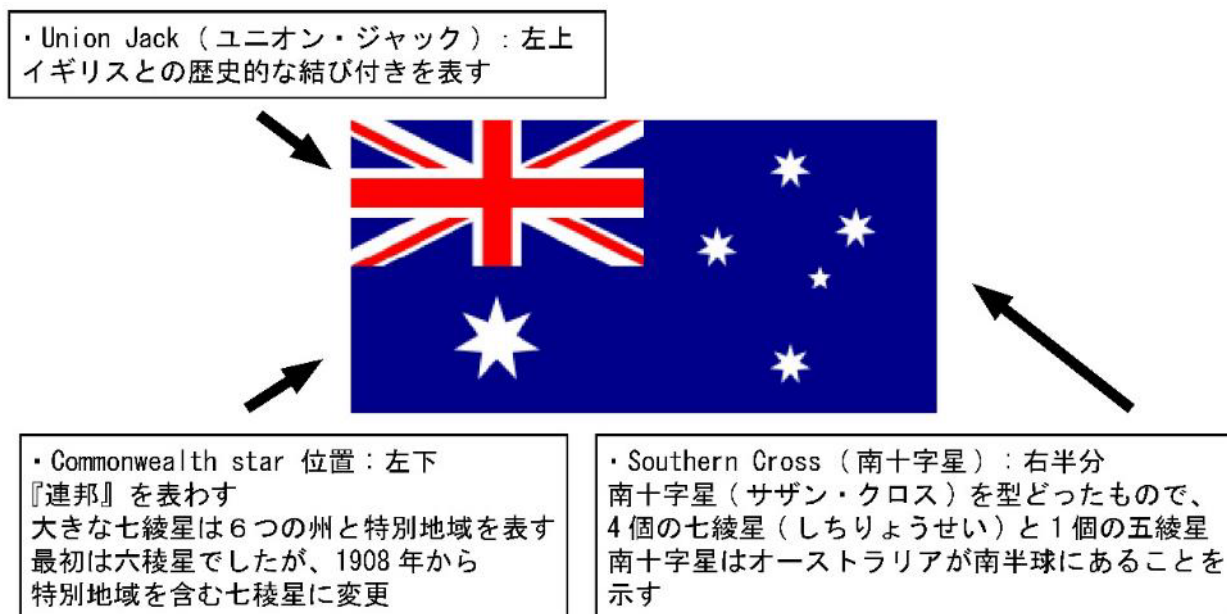


図 2 オーストラリアの国旗の概要

##### (2) 面積・人口・時差

面積は約 7680000 km<sup>2</sup>。世界第 6 位であり日本の約 20 倍である。一方、人口は約 2575 万人で日本の 1/5 倍である。

オーストラリアの時間帯は、東部、中央部、西部の 3 つのエリアで異なる。日本の標準時間と比較した場合、東部（クイーンズランド州、ニュー・サウス・ウェールズ州、ビクトリア州、首都特別地域）は日本より 1 時間早く、中央部（ノーザン・テリトリー、南オーストラリア州）は日本より 30 分早い。逆に西部（西オーストラリア州）は日本よりも 1 時間遅

	日本 ●	オーストラリア 	
人口	1 億 2,477 万人 (総務省)	約 2,575 万人 (豪州統計局)	← 日本の約 1/5 倍
面積	378,000 km <sup>2</sup> (総務省)	7,688,000 km <sup>2</sup> (外務省)	← 日本の約 20 倍

図 3 オーストラリアと日本の人口・面積の比較

い。またオーストラリアではサマータイムがあり開始する10月には1時間時計の針を進め、終了する3月もしくは4月には1時間時計の針を戻す必要がある。



図4 オーストラリアに日本を重ねた図

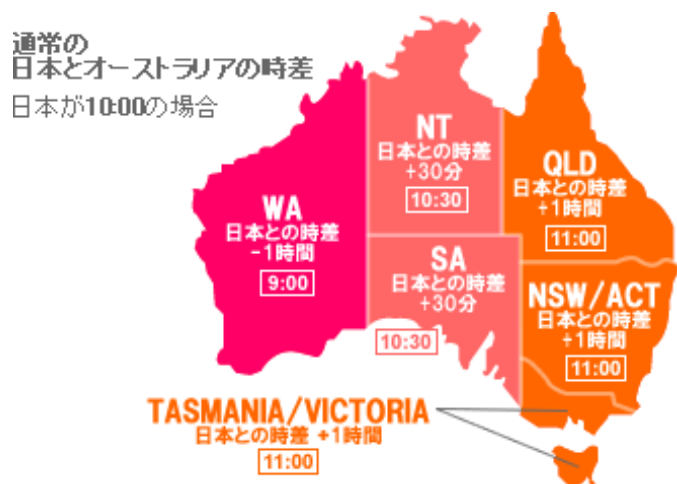


図5 通常の日本とオーストラリアの時差

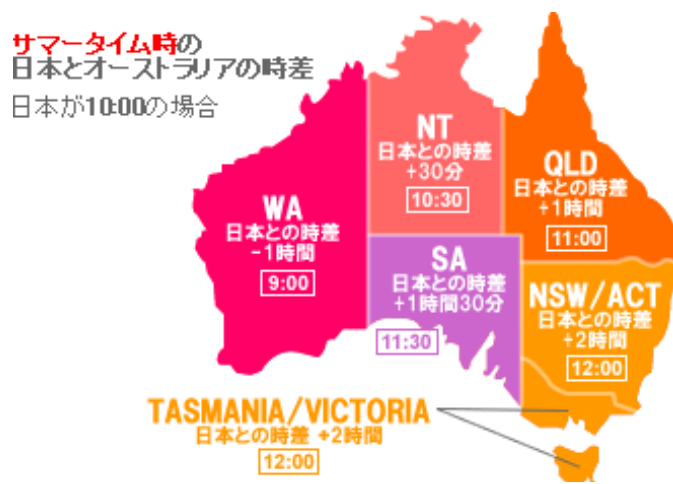


図6 サマータイム時の日本とオーストラリアの時差

### (3) 言語・宗教・民族

言語は英語である。また、キリスト教52%、無宗教30%（2016年国勢調査）である。民族はアングロサクソン系等欧州系が中心でその他に中東系、アジア系、先住民などが多民族国家である。



#### (4) 州・都市

オーストラリア は6つの州とその他の特別地域に区分される。図7を参照。

##### 【6つの州】

NSW：ニュー・サウス・ウェールズ州

VIC：ビクトリア州

QLD：クィーンズランド州

SA：南オーストラリア州

WA：西オーストラリア州

TAS：タスマニア州

##### 【特別地域】

ACT：オーストラリアキャピタルテリトリー

NT(北部準州特別地域)：ノーザンテリトリー

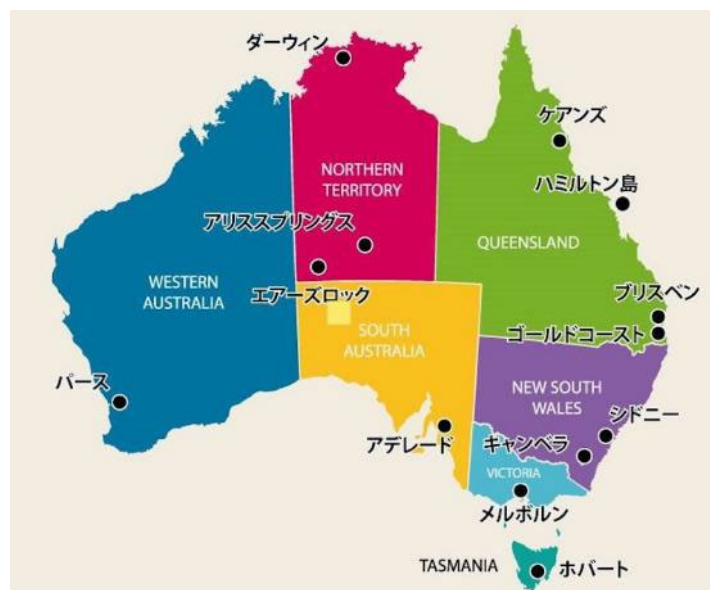


図7 オーストラリアの州と主な都市

## (5) 通貨

現行のオーストラリア・ドル券の特徴は紙幣が紙ではなくポリマー紙幣である。製造コストは高いものの、その耐久性は優れており洗濯機で誤って洗濯してしまっても原型をとどめるほど丈夫である。また、特殊ホログラムと言って一部を透明にし、向こう側が透けるようになっており、偽造防止に大いに貢献している。

オーストラリアの通貨単位は「オーストラリア・ドル(「AUS\$」あるいは「AUD」と表記)」という。また、補助通貨として「セント(「¢」で表記)」もあり、100セントは1豪ドルに相当する。

オーストラリア・ドルと日本円の為替レートは 1 オーストラリア・ドル $\approx$ 92.55 円となっている (2023 年 2 月 20 日 11:00 UTC)。



図 9 オーストラリアの通貨 (AUS\$)

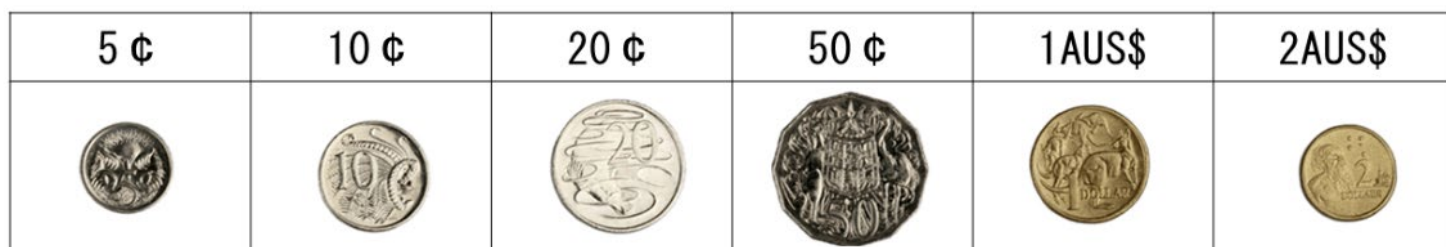


図 8 オーストラリアの通貨 (¢)

## (6) 祝祭日・イベント

オーストラリアには年間で多くの祝祭日があり、銀行やオフィス、一部の店舗などが休業になる。国が定めるオーストラリアの祝祭日は、元旦（ニュー・イヤーズ・デー）、オーストラリア・デイ、グッド・フライデー、イースター・マンデー、アンザック・デー、クリスマス・デー、ボクシング・デーであり、一部では、「メルボルン市内のみ」「ブリスベン市内のみ」といった祝日もある。

### Australia Day (オーストラリア・デイ)

オーストラリア・デイは、毎年1月26日に固定され、オーストラリア全州同じ日となる。1788年にニュー・サウス・ウェールズ州のポートジャクソンにイギリスからの移民第一船が到着した日を記念して、1月26日が祝日と定められている。オーストラリア全土で各種式典が開かれているが、一部の人たちは先住民を侵略した日であるとして、抗議運動も行われる。

### Labour Day (レイバー・デイ)

レイバー・デイはその名前の通り「労働者の日」。ノーザンテリトリー州では「May Day (メーデー)」、タスマニア州では「Eight Hours Day (エイトアワーズ・デイ)」と呼ばれる。ニュー・サウス・ウェールズ州、南オーストラリアメーデー都特別区は10月の第1月曜日、西オーストラリア州では3月の第1月曜日、ビクトリア州とタスマニア州は3月の第2月曜日、クイーンズランド州とノーザンテリトリー準州では5月の第1月曜日と、州により異なる。

### Good Friday (グッド・フライデー)

グッド・フライデーは、日本語では「聖金曜日」と訳され、キリスト教のイースター（復活祭）前の金曜日、キリスト教の重要な日である。イースター・マンデーと合わせて、オーストラリアでは4連休の大型連休となり、特にこのグッド・フライデーは多くの商店が休みとなる。日にちは3月下旬から4月中旬の間を毎年変動する。

### Easter Monday (イースター・マンデー)

イースター・マンデーは、イースター（復活祭）翌日の月曜日、オーストラリアではグッド・フライデーとあわせて4連休となる。グッド・フライデーほどではないが、休業とする商店、飲食店も多い。

### Anzac Day (アンザック・デー)

アンザック・デーは、第一次世界大戦のガリポリの戦いで犠牲となった、オーストラリア・ニュージーランド連合軍（Anzac）を追悼するために定められた休日である。毎年4月25

日に固定されている。

### **Queen's Birthday (クイーンズ・バースデー)**

クイーンズ・バースデー、キングス・バースデーは、オーストラリアの元首であるイギリスの国王、女王の誕生日にあわせて設定されていたが、1936年のジョージ5世の死後、日付は6月3日である彼の誕生日に固定された。その後、西オーストラリア州を除いて6月の第2月曜とされる。西オーストラリア州は9月の最終月曜日となる。

### **Boxing Day (ボクシング・デー)**

ボクシング・デーは毎年クリスマスの翌日12月26日になり、オーストラリアをはじめとする多くの英連邦国で制定されている祭日。英国の雇用主が従業員にギフトを箱（ボックス）に入れて渡した日が12月26日であったことから始まった祭日と言われている。25日のクリスマスは休業する商店、飲食店が多いが、このボクシング・デーは比較的営業を行う店が多く、デパート等ではセールも行われ、多くの買い物客でにぎわう。

※留学中には MOONBA FESTIVAL という夏祭りのようなものが行われていた。

### (7) 気温・降水量・四季

オーストラリアではエリアによって気候が大きく異なり、平均気温にもかなり差が出る。特にオーストラリア北部に位置するケアンズと比べ、南部に位置するメルボルンでは冬の平均気温が10℃以上低くなる。

降水量についても、都市ごとにより違いが出る。主要都市の中ではケアンズの降水量がかなり多く、アデレードやパースなどでは比較的降水量が少ない傾向がある。

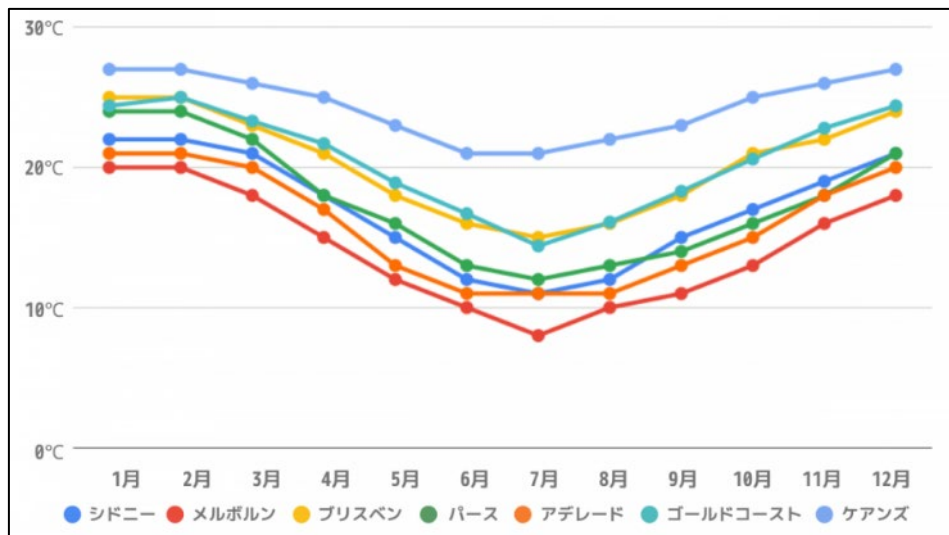


図 10 オーストラリア国内の主要都市の平均気温

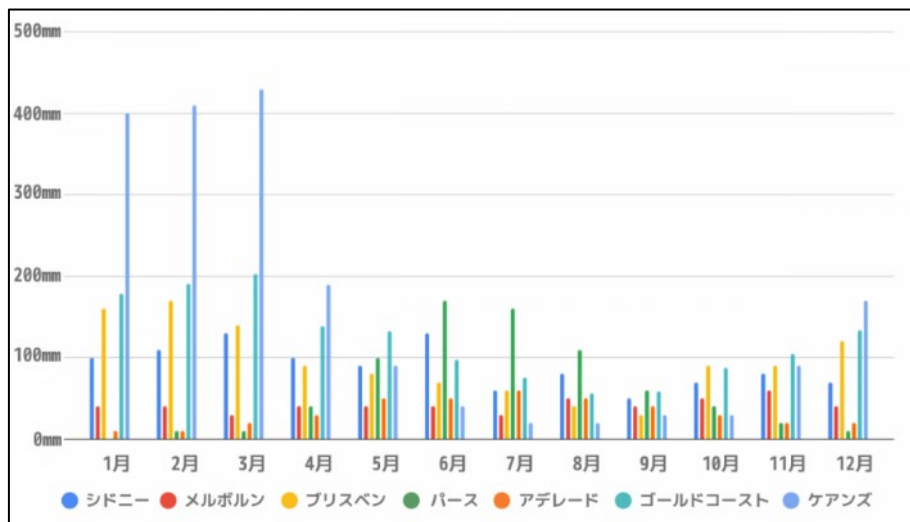


図 11 オーストラリア国内の主要都市の降水量

## (8) 世界遺産

### シドニー・オペラハウス / Sydney Opera House

オーストラリアの芸術の拠点でもあるオペラハウスは、14年もの建設期間を経て1973年に完成した。“ヨットの帆”または“白い貝殻”のような屋根が独創的なデザインで、シドニーを訪れる観光客の撮影スポットとなっている。20世紀を代表する建築物のひとつと言われ、2007年に世界文化遺産に登録された。



図 12 シドニー・オペラハウス

### ウルル=カタ・ジュタ国立公園(エアーズロック) / Uluru-Kata Tjuta National Park

オーストラリアのほぼ中央に位置し、“ウルル/エアーズロック”があることで有名な国立公園。ウルルは周囲9.4km、地上高340mの世界で2番目に大きい一枚岩で、「地球のへそ」や「大地のへそ」とも呼ばれる。アウトバックの平原にこつ然と現れる姿は非常に神秘的で、世界中から観光客が集まる。1994年に複合遺産として認定。



図 13 ウルル=カタ・ジュタ国立公園(エアーズロック)

#### グレート・バリア・リーフ

全長 2,300km に広がる世界最大級の珊瑚礁地帯。オーストラリア大陸の縦幅の 2/3 あると言われている。1981 年、サンゴ礁としては世界で初めて世界自然遺産に登録された。



図 14 グレート・バリア・リーフ

## (9) 動物

1億年以上前にゴンドワナ大陸から分離し、孤立した大陸となったオーストラリアは、ここにしか生息しない固有種の宝庫となっている。有袋類、単孔類、有胎盤類と3種類すべての哺乳類が生息する数少ない大陸の一つで、多様性に富んでいる。オーストラリアの西部に位置する西オーストラリア州では、豊かな自然の中で、野生の珍しい動物や海洋生物と間近に出会うことができる。



カンガルー



コアラ



ハリモグラ



カモノハシ

### 参考文献

1. オーストラリア基礎データ | 外務省,  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>.
2. オーストラリア・時差,  
<http://www.ryokojoho.jp/aus/other/time.cfm>.
3. The True Size Of ...,  
[https://www.thetruesize.com/#?borders=1~!MTI2NzAyMTU.MTkzNzIxOA\\*NzA5OTMyNw\(MjAzNTMyMzM~!JP\\*Njg0ODg5Nw.Mzg4MTk2\)MQ~!AU\\*NTQ4Nzc3OA.NzE2MDczNw\)Mg~!AU\\*MA.MTgwMDAwMDA\)Mw](https://www.thetruesize.com/#?borders=1~!MTI2NzAyMTU.MTkzNzIxOA*NzA5OTMyNw(MjAzNTMyMzM~!JP*Njg0ODg5Nw.Mzg4MTk2)MQ~!AU*NTQ4Nzc3OA.NzE2MDczNw)Mg~!AU*MA.MTgwMDAwMDA)Mw).



4. 【2022年更新】 オーストラリアの州と主な都市,  
<https://www.traveldonkey.jp/blog/australia/19699/>.
5. FX・外国為替 - Yahoo!ファイナンス, <https://finance.yahoo.co.jp/fx/>.
6. オーストラリアの通貨 | オーストラリア留学・ワーキングホリデーならエデュ・オセアニア,  
<https://www.esojapan.com.au/footer/currency.html>.
7. オーストラリアの祝日 (2022年) ,  
[https://www.traveldonkey.jp/blog/australia/australia\\_travel\\_information/2487/](https://www.traveldonkey.jp/blog/australia/australia_travel_information/2487/).
8. オーストラリアの気候とおすすめの服装を解説! | スクールウィズ,  
<https://schoolwith.me/countries/AU/climate>.
9. Travel Weather Averages, <https://www.weatherbase.com/>.
10. オーストラリアの世界遺産 15 選 自然遺産から文化遺産まで: ETAS Online Center,  
<https://etas-auvisa.com/world-heritage-site/index.html#world2-1>.
11. グレート・バリア・リーフ | オーストラリア | 世界遺産オンラインガイド,  
<https://worldheritagesite.xyz/great-barrier-reef/>.
12. 西オーストラリア州で出会える野生動物や海洋生物たち…有袋類編 | 動物のリアルを伝える Web メディア「REANIMAL」, <https://reanimal.jp/article/2020/06/28/498.html>.

## 3-2 歴史

### (1) 人類の進出

約5万年前の第4氷河期、今より海面が低かった時代、現在のニューギニア、オーストラリア、タスマニア島などがサフル大陸と呼ばれる一つの陸地として存在していた(図14)。この時代に人類は東南アジアからサフル大陸へ移住してきたと言われている。氷河期が終わり、海面上昇すると大陸間の移動は困難になり、オーストラリア大陸に住む人類は他と隔絶された。そこで、人々は、他からの影響を受けない環境で、「ドリームタイム(Dream Time)」という、独自の生活、文化を営んだのであった。

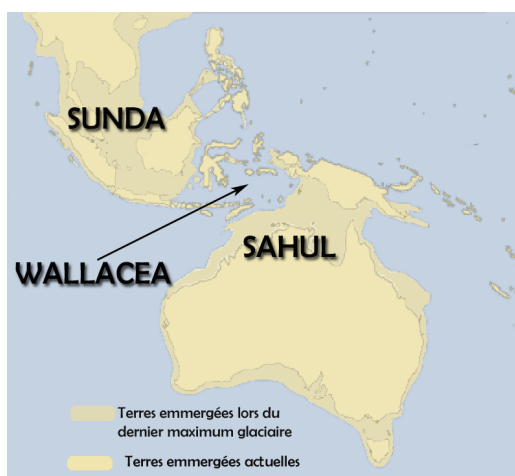


図15 サフル大陸

### (2) 植民地時代

大航海時代、オーストラリア大陸は幾人かのヨーロッパ人に発見、探索された。しかし、当時の航海の目的である香辛料などは見つからず、オーストラリア大陸への注目は小さかった。

1770年、イギリス人のジェームズ・クックは太平洋探検航海の途中でオーストラリア大陸のシドニーのボタニー湾に到達し、その地に対しイギリス領による領有を宣言した。この地は「ニュー・サウス・ウェールズ」と命名された。

その後、ニュー・サウス・ウェールズは、イギリスの植民地として本格的に開発がすすめられた。開発当初はアメリカに代わる流刑地として使用され、1788年、囚人を含む移民団が到着し、海軍大佐のフィリップが初代総督に就任した。イギリスによる植民地支配は続き、1829年には大陸全体がその支配下に置かれた。土地の開発にあたっては先住民族との抗争、虐殺が行われていた。先住民族への人種差別政策も施行されていた。

1851年、エドワード・ハーグレイヴスがバサーストで金鉱を発見した。これをきっかけに、ゴールド・ラッシュが始まる(図16)。世界から移民が押し寄せ、人口が急激に増加し、町が急速に発展した。その影響で、白豪主義に基づく政策が取られるようになった。



図 16 ゴールド・ラッシュ

植民地は徐々に成熟し、羊毛や鉱物の採掘で経済的にも安定していた。そこで、イギリス政府はそれぞれの植民地に憲法や議会制度を与え、自治権を認めていった。19世紀末までには6つの自治政府がつけられた。

### (3) オーストラリア連邦の成立と世界大戦

1891年、労使対立や金融恐慌などの社会不安も相まって、6つの植民地が集まって、連邦結成への会議が開かれた。そして、その後10年かけて憲法草案をまとめ、1901年にイギリス議会によって承認され、「オーストラリア連邦」が成立した。その首都として、シドニーとメルボルンが手を挙げたが、協議の結果、中間地点のキャンベラを首都に制定することが決定した。

1914年に勃興した第一次大戦に、オーストラリアはイギリスと連合国側について参戦した。人口500万人程度にも関わらず、40万人の兵士を投入し、この戦争では約6万人の死者を出した。その後も第二次世界大戦に巻き込まれ、シドニー港、ダーウィンへの爆撃などの被害を受けることになったのだった。

### (4) 白豪主義の撤廃

第二次世界大戦後、人口増加のため、オーストラリアは大量移民計画を発表した。それに伴い、従来の人種差別政策の撤回を余儀なくされていった。また、宗主国であるイギリスのEC加盟で、アジア諸国との外交の必要性が増大したのもその一因である。1973年に移民法、オーストラリア市民憲法の改正、1975年に人種差別禁止法を制定し、人種差別禁止へ動いた。そして、多文化主義を国策に掲げ、現在のオーストラリアを形成した。

### 3-3 オーストラリアの人物

#### (1) ダグラス・モーソン

彼はイングランドの北部で生まれ、2歳の時に両親と共にオーストラリアに移住した。シドニー大学で学んだあと、岩石学と鉱物学の講師となった。1907年にはシャクルトンが率いるイギリスの南極探検隊に加わり、エレバス山の登頂に成功した。その後南の南磁極に到達したメンバーとなった。1911年から1914年の間、オーストラリア南極探検隊を率いて、オーストラリアに近い南極沿岸地区の探索をした。しかし帰国後モーソンの業績は第一次世界大戦の勃発によって世間の注目を集めることはなかった。1915年に南極探検隊の科学的功績に対して、王立地理学会から金メダルが贈られた。そのあとはオーストラリアのフリンダース山脈の地質学の研究を行う他、1929年から2回のイギリス～オーストラリア～ニュージーランドの南極探検隊の隊長を務めた。1984年から発行された旧100オーストラリア・ドル紙幣に肖像が使用されている。



図 17 ダグラス・モーソン

#### (2) ハワード・フローリー

現代多くの薬品に使用されているペニシリンは1928年にアレクサンダー・フレミングによって発見された。フレミングはペニシリンの大量生産と効果向上に努めたが、上手くいくことはなかった。そんな中、フレミングの論文を読んでペニシリンに興味を持ったのがハワード・フローリーであった。彼はフレミングによるペニシリンの発見から10年以上たった1940年に不安定ながらもペニシリンの粉末を得ることに成功した。その後動物実験や臨床試験などを進めて第二次世界大戦中にはペニシリンの大量生産が可能となった。特にノルマンディー上陸作戦では病院に運ばれてきた負傷者たちの命をたくさん救うことができた。1945年にはフレミングとフローリーと共同研究者であるチェーンはノーベル医学生理学賞を共同受賞した。



図 18 ハワード・フローリー

### (3) フランク・マクファーレン・バーネット

彼は免疫の研究で知られるオーストラリアのウイルス学者である。ビクトリア州で生まれて、1924年にメルボルン大学で医学博士号を、1928年にはロンドン大学で博士号を取得した。1950年代より免疫学の分野で研究をはじめ、白血球がどのように抗体を破壊の目標にするのかを説明するクローン選択説に大きく関わった。その後ピーター・メダワーと共に免疫寛容の獲得の研究で1960年度のノーベル生理学・医学賞を受賞した。この研究は臓器移植の基盤となった。彼は1956年に研究室を出て、1978年までメルボルン大学で働いていた。オーストラリアの科学アカデミーの設立にも関わり会長を務めた。1960年には初代オーストラリア・オブ・ザ・イヤーにも輝くという功績を残している。



図 19 フランク・マクファーレン・バーネット

#### 参考文献

1. ダグラス・モーソン - ダグラス・モーソンの概要 - わかりやすく解説 Weblio 辞書 2023年3月13日閲覧, <https://www.weblio.jp/wkpja/content/>
2. 世界初の抗生物質！青カビから生まれた「ペニシリン」とは【抗生物質の現在】 | アイドラッグマート コラム, 2023年3月13日閲覧, <https://www.idmart.net/columns/antibiotics-penicillin/>
3. フランク・マクファーレン・バーネット - フランク・マクファーレン・バーネットの概要 - わかりやすく解説 Weblio 辞書, 2023年3月13日閲覧, <https://www.weblio.jp/wkpja/content/>

## 4. メルボルンの概要

### 4-1 基礎情報

#### (1) 地理・人口

メルボルンはオーストラリアの南東部に位置するビクトリア州の州都である。

人口は約 480 万人である。日本との時差はあまりなく、通常時+1時間、サマータイム期間は+2時間である。(サマータイムとは10月の第一日曜日の午前2時に始まり、4月の第一日曜日の午前3時に終わる。)日本からの所要時間は直行便で約10時間30分ほどである。メルボルン空港から市内までは約18kmであり、空港から市内までの鉄道はないが、24h運行のシャトルバスであるSkybus(一人約18豪ドル)、タクシー(約50豪ドル)などを利用して市内まで移動することができる。



図 20 メルボルンの位置

## (2) 気候

季節	春			夏			秋			冬		
月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
平均最高気温	17°C	20°C	22°C	24°C	26°C	26°C	24°C	21°C	17°C	14°C	14°C	15°C
平均最低気温	9°C	10°C	12°C	14°C	15°C	16°C	14°C	12°C	10°C	7°C	6°C	7°C
服装	011月以降は暖かい日もあるが、基本的に日中も寒く、長袖が必要。朝晩は特に気温が下がるので、厚手のコートを着用。夜間は特に気温が下がるので、パジャマも厚手の方が良い。			半袖、半ズボン、サンダルで過ごせる。屋内やバス、電車内は冷房が強いため、羽織るものを持ち歩いた方がよい。朝晩は涼しいため、日本のような寝苦しさは少ない。			日中は半袖で過ごせることもあるが、4月以降は薄手の長袖が適している。朝晩は気温が下がるため、基本的に少し厚手の長袖（薄手のジャケットやセーター）と長ズボンが必要。			日中も寒く、上着が必要。朝晩は特に気温が下がるので、厚手のコートが不可欠。夜間は特に気温が下がるので、パジャマも厚手のものが良い。		

図 21 メルボルンの気候

一年を通して平均最高気温が 14 度を下回る月がなく、穏やかな気候であるといえる。夏も朝晩は涼しいため、日本よりも過ごしやすそうである。

## (3) 産業、経済

メルボルンはオーストラリアの三大企業であるテルストラ（通信会社）、BHP ビリトン、ナショナルオーストラリア銀行の本拠地である。他にも多くの上場企業のオフィスビルが立ち並び、シドニーに次ぐ金融都市である。

ビクトリア州は長年にわたり国内の自動車産業を牽引する地域であったというのが、実際に見てみると街中を走る車の殆どが日本製で、トヨタ、日産、ホンダ、マツダなど、日本でもよく見る車がたくさんあった。

## (4) 治安

メルボルンは「世界で最も住みやすい都市」と言われており、世界的に見ても治安の良い都市である。

実際に夜外を出歩いてみても、そこまで治安が悪い印象はなかったが、一度ホテル前で激しい口論をするグループを目撃した。また、ホームレスの方がお金を求める様子であったり、信号を守らない人が多かったり（車は守る）、夜になると酔っぱらって絡んでくる人がでてきたりという様子が見られた。しかし、会話途中に聞き取れなかったところがあっても気を使ってゆっくり話してくれたり、店員が基本的に笑顔で愛想がよかったり、路面電車（トラム）ではお年寄りに席を譲る方、スマホを忘れた人に届けに行く人が居たりなど、メルボルンに住む人々のやさしさを感じる場面も多くあった。差別も滞在期間中は一度も受けなかった。

総じて、想像していたよりも治安はかなり良い印象を受けた。

## (5) 文化

メルボルンはオーストラリアの中でもとりわけ英国のような雰囲気のある地域で、建物

やディスプレイなど、街中を歩くだけでもヨーロッパの街並みを楽しめる。1960年代に米国から伝来したといわれるストリート・アートも至るところに見られた。



図 22 植物の葉にもストリート・アート

また、一年を通して穏やかな気候であるため、スポーツに適しており、ラグビー、テニス、クリケットなどの大きな大会が開催されている。

特に私たちがいる間は、ちょうどWBCが開催されている期間であったが、特に野球で盛り上がる様子はなく、カジノでもクリケットやイギリスのプレミアリーグ（サッカー）の中継映像が放送されていることはあっても、WBCの中継映像は流れていなかった。

## （6）商業

物価が非常に高く、なにを買うにしても高く感じた。その一端は最低賃金が日本に比べて二倍以上であることに寄るものと思われる。ダイソーもメルボルンにはあったが、100円均一ではなく、A\$3.3均一であったため、全く惹かれなかった。



図 23 ダイソーの料金表示

カジノの近くに DFO South Wharf というショッピングモールがあったが、中のテナントは、レストランや家具のお店以外は日本でよく見るお店が並んでいた。また、メルボルンの



商業施設は日本に比べて閉まる時間がとても早く、16,17時頃にはどこも閉まっている印象である。

メルボルンには日本料理店はじめアジアの料理店が多くあり、その一方でオーストラリアらしさを感じるレストランはそこまで多くない印象であった。実際に筆者が寄った商業施設のフードコートでは、10数店あるテナントのうち、3店が日本料理のお店であり、その需要の高さを感じた。日本料理のお店の多くは寿司を売るお店である。寿司といっても日本のすしとは大きく異なり、太巻きやいなりがメインである。にぎり寿司は存在するものの、ほとんどがサーモンであり、サーモン以外の魚を生で食べる文化があまり浸透していないことを感じた。図5は筆者が実際に買ったにぎりのセットの写真である。中にはマグロやエビなどのにぎりが入っているメルボルンではあまり見ないタイプのものであったが、気になったのは巻物である。ここではかっぱ巻きの要領でニンジンを生で巻いた巻物が入っていて驚いた。味は良くない。



図 24 にぎり寿司

また、メルボルン市内に中華街が存在していることも驚きであった。実際入店してみたが、日本で食べる中華とほとんど相違なく、おいしく頂けたが、それ以上に中華街が想像以上に大きく、中華料理がここまで広く受け入れられていることに驚いた。

オーストラリアらしいお店としては、ハンバーガーを売るお店が非常に多く、筆者も滞在期間中何個ハンバーガーを食べたか覚えていない。また、現地の人におすすめの食事をきいたところ、メルボルンの名物料理であるチキンパルマ（図 25）を挙げる人が多く、これを売るお店も多く存在した。また、カフェが多く存在することも特徴的で、どのカフェも総じ

てクロワッサンを売っているのが印象的であった。



図 25 チキンパルマ

参考文献

1. オーストラリア留学ワールド メルボルンの都市情報  
<https://tabiken.com/au/city/melbourne/>
2. オーストラリア留学知恵袋  
<https://ryugaku-chiebukuro.com/info/minimum-wage/>
3. 株式会社 SN 食品研究所  
<https://snfoods.co.jp/recipe/detail/751>

## 4-2 歴史

### (1) メルボルンの歴史

メルボルンには、先住民アボリジニのクリン族系に属する人々が暮らしていた。50 のテント生活から始まった街づくりが移民の増加に伴って発展し、1839 年には 70 万人を越える大都市に成長を遂げた。

特に 1850 年代にビクトリア州で金が発掘されたことにより、移民が一気に増加し、都市化が進行した。ビクトリア州立図書館、ビクトリア州議事堂、メルボルン大学などはこの 19 世紀のゴールドラッシュ期に建設された代表的な建物である。

以下、メルボルンを代表する歴史的な建造物を紹介する。

### (2) メルボルンの歴史的な建造物

#### セント・パトリック大聖堂

ウィリアム・ウォーデルにより設計されたこの建築物は、ビクトリア州のローマ・カトリック総本山とされる大聖堂であり、オーストラリア最大のゴシック建築である。しかし、1858 年に建築が開始されたが、労働者不足、不況により、完成したのは 80 年以上経過した 1939 年であった。



図 26 セント・パトリック大聖堂

#### ビクトリア州立図書館

ジョセフ・リードにより設計され、1856 年に完成した建造物で、オーストラリア最大の図書館である。2 万冊を超える蔵書をはじめ、数十万の絵画、新聞、地図、写本、オーディオ、デジタルメディアまでを所蔵している。

4 階から 6 階が吹き抜けになっており、机が放射状に配置されたドーム空間「La Trobe Reading Room」はこの図書館の最大の特徴であり、トリップアドバイザーの死ぬまでに行

きたい図書館にも選出された。



図 27 ビクトリア州立図書館

#### ビクトリア州議事堂

コリント様式の建築物で、連邦議会が開かれた議事堂である。

ゴールドラッシュ最盛期の 1856 年に建設され、1901 年に初の連邦議会が招集された。オーストラリア連邦が成立した 1901 年からキャンベラに首都が移る 1927 年まで議会が開かれた。



図 28 ビクトリア州議事堂

#### 王立展示館（ロイヤルエキシビション・ビル）

オーストラリア初の世界文化遺産である。1880 年に開催された国際博覧会のために建設された展示館である。

19 世紀半ばから 20 世紀初頭の国際博覧会の多くは、一時的に建設されるものが多いが、メルボルンでは恒久的な建物として造ったため、唯一現存する国際博覧会の建物となり、2004 年にカールトン庭園とともに世界遺産に登録された。

州立図書館と同様にジョセフ・リードにより設計され、オーストラリア初の大陸ヨーロッパ風の建築であり、ビザンチン、ロマネスク、ルネサンスを複合した当時の典型的な展示館である。

1888年にヨーロッパによる植民地化から100周年を記念した博覧会が開催され、6か月でメルボルンの人口の2倍となる200万人以上が訪れた。<sup>2</sup>



図 29 王立展示館 (HP から引用)

#### 参考文献

1. メルボルンの歴史と遺産, <https://jp.visitmelbourne.com/regions/melbourne/see-and-do/art-and-culture/history-and-heritage>, (2023.3.13 閲覧)
2. メルボルンの偉大な歴史に触れる遺産・旧跡を大特集 ～必見の名所～, <http://www.veltraman.com/melbourne/tourism/heritage/index.html>, (2023.3.13 閲覧)
3. ROYAL EXHIBITION BUIKDING HP, <https://museumsvictoria.com.au/reb/world-heritage/>, (2023.3.13 閲覧)

#### 4-3 メルボルンに由来する人物

##### (1) Cate Blanchett (1969年5月14日～)

ケイト・ブランシェットはオーストラリア、ビクトリア州メルボルンで生まれた女優である。本名は Catherine Élise Blanchett である。オーストラリア国立演劇学院で演劇を学び、1994年に『Police Rescue』で映画デビューをする。その後、1997年に『オスカーとルシンダ』で AFI 主演女優賞を受賞、1998年にエリザベス1世を演じた映画『エリザベス』でゴールデングローブ賞主演女優賞を受賞など、数々の人気映画に出演、受賞した。2022年に最新作の『TAR/ター』では、4度目となるゴールデングローブ賞主演女優賞、2度目となるヴェネチア国際映画祭の女優賞を受賞となった。



図 30 Cate Blanchett

##### (2) Lisa Gerrard (1961年4月12日～)

リサ・ジェラルドはオーストラリア、ビクトリア州メルボルンで生まれた作曲家・歌手である。1980年代前半にブレンダン・ペリーとデッド・カン・ダンスを結成し音楽活動を始め、1984年から1995年の間に9枚のアルバムをリリースした。1995年には初のソロアルバム『ザ・ミラー・プール』がリリースされ、ビクトリア・フィルハーモニー管弦楽団と共演した。その後、多くの曲を作成し、様々な映画やテレビコマーシャルに使用された。また、『Insider』『Ali』でゴールデングローブ賞ノミネート、『Gladiator』でアカデミー賞ノミネート、『Whale Rider』で4つの国際映画賞を受賞している。



図 31 Lisa Gerrard

##### (3) John Malcom Fraser (1930年5月21日～2015年3月20日)

ジョン・マルコム・フレイザーはオーストラリア、ビクトリア州メルボルンの郊外で生まれた政治家であり、オーストラリアの第22代の首相である。オックスフォード大学で政治学・経済学を学んだ後、1955年にビクトリア州の自由党下院議員となり、1975年に自由党党首となる。ホイットラム政権の辞職に伴い、1975年から1983年までオーストラリアの第22代の首相となる。その間、1976年に日本との間に日豪友好協力基本条約を締結した。1988年にホークが率いる労働党に政権を奪われ、自由党党首を辞任、議員を辞した。政界を去った後も南アフリカのアパルトヘイト廃止の運動などに関わった。

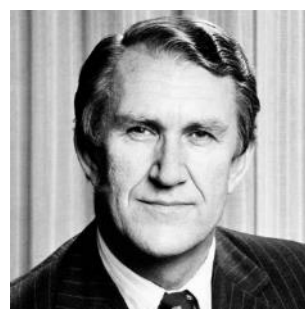


図 32 John Malcom Fraser

#### 参考文献

1. ケイト・ブランシェット | 俳優・監督 | 映画.com, <https://eiga.com/person/29802/>.
2. Yahoo!Japan news | ケイト・ブランシェットが引退の意思を告白。故郷のオーストラリアで、ガーデニングを楽しみたいとも語る【SPUR セレブ通信】, <https://news.yahoo.co.jp/articles/6caaeaba82e75da9ee6a9e10dc3e483d2cde3e2d>.
3. Lisa Gerrard, <https://www.lisagerrard.com/>.
4. オーストラリア辞典, <https://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/dict>.

## 5. メルボルン大学について

### 5-1 キャンパス概要

メルボルン大学はビクトリア州最古の大学として 170 年の歴史がある。”Times Higher Education2022“では、オーストラリア国内で1位、世界 33 位にランクされている。

今回私たちは、メルボルン大学の 7 つあるキャンパスの中でメルボルン中心部から少し北に位置する Parkville キャンパスを訪問した。キャンパスがフリートラムゾーンの外にあるため、無料で行くにはフリートラムゾーンから少し歩く必要がある。

キャンパス内はとても広大でいくつもの建物が並んでいた。歴史を感じる建物、現代建築を活用したユニークな建物など多種多様であった。図 33 はキャンパス内の建物の写真である。左の写真は Old Arts Building で、右の写真が Glyn Davis Building(MSD)である。



図 33 キャンパス内の建物

キャンパス内がとても広いので、”Lost on Campus”というアプリや大学の HP のマップを使用して受講したい授業の建物や集合場所に行っていた。建物も分野に応じて大まかに分かれていたためその名前からも受けたい授業の講義室を探すことができた。

また、講義を行う建物の他に、カフェや軽食を販売するキオスク、キッチンカーなどが構内に複数あり、多くの学生たちが利用していた。キャンパス内には芝生があり、そこでランチを取る学生や本を読むなどして休憩している学生もいた。訪問した時がちょうど学期始まりであったので、クラブやサークルに勧誘する人も多くみられた。ポスターを配る学生やフリーフードを提供している団体もあった。大学を案内してくれた学生によると、メルボルン大学には 200 以上ものサークルがあるとのことだった。

学生はオーストラリア出身の学生だけでなく、様々な国からの留学生も多かった。特に中国人留学生が多くみられた。出身の国に関係なく異なる人種の学生同士が交流を行っており、留学をしやすい大学という印象を持った。



以上のように、メルボルン大学は、見た目も雰囲気もとても過ごしやすく、色々な文化が感じられる素晴らしい大学であった。

#### 参考文献

1. メルボルン大学について, THE UNIVERSITY OF MELBOURNE,  
<https://www.melbourneuni.jp/about>.
2. Maps, THE UNIVERSITY OF MELBOURNE,  
<https://maps.unimelb.edu.au/>.

### 5-2 講義概要

ここでは、メルボルン大学で出席した講義の中で印象に残ったものについて、概要や授業スタイル、感想などをまとめている。メルボルン大学での講義は、どの講義もある程度自由に受けることができるが、Beth さんに提示していただいた講義リストから選んで講義を聴講することが多かった。そのリストには同じ講義の名前で日にちが違うものがあり、人によって異なる日の講義を受けた。その講義については複数の講義概要を記載してある。

#### Medical Imaging

講義開始 5 分前の時点で、講義室に自分たち以外の学生が 1 人しかいなかった。その後学生が増えることはなく、定刻になっても教授が姿を見せる気配はなかった。その一方で、先ほどの学生が Zoom で講義を受けており、その学生に「この講義はあるのか?」と聞いたところ「あるよ」と言われたので、私たちはこの講義が Zoom で実施されているものだと思います、Zoom のリンクもなかったので受講を断念した。しかし、後から講義の開始時間が配布されたタイムテーブルに記載された時間よりも 1 時間遅かったことがわかった。この講義がメルボルン大学で最初に受け(ようとし)た講義だったので、少し心を折られた。

#### Building Information Modeling

建築分野の授業であったみたいで、Building Information Modeling とは何なのかという説明から入った。大学のサイトのようなものを使い、解答の投票をしながら授業を行っていたのが面白かった。2 回目の授業であったため、基本的な説明とソフトウェアの紹介が大半を占めていた。

#### Mechanics for Bioengineering

物体にかかる力やモーメントおよびその図示について、基本的な事柄から丁寧に説明された。日本における高校物理力学の基礎にあたる内容であった。講義は事前に配布されたスライドと教授の板書を併用して進められた。講義の最後に課題として「物体にかかる力を分析できることで、その物体になにが起こるか」という、それまでの講義内容に対してかなり抽象度の高い質問を投げかけられたのが印象に残った。

## Circuits and Systems

キルヒホッフの電圧法則(KVL)およびキルヒホッフの電流法則(KCL)を用いて、閉回路内の電圧や電流を求めることが講義の中心であった。日本における高校物理電磁気学の基本的な内容であった。教授がいくつかの回路を例として扱いながら、電圧および電流の求め方を解説していた。教授の説明がとても丁寧でわかりやすかった。



図 34 Circuits and Systems の授業風景

## Applied Computation in Bioengineering

講義の前半では、物体にかかる力やモーメントについての解説がされていて、そこまでは Mechanics for Bioengineering とかなり似た内容であった。この講義では、そこからその内容を人間の足の動きに応用した考察がなされていた。講義の後半では、前半に触れた力学モデルに様々な実数値を代入するという文脈からプログラミングへと話題が移り、MATLAB における基本的な繰返処理について、いくつかの例題を用いて解説がなされていた。MATLAB を扱ったことがほとんどなくても十分に理解できる内容であった。(生命理工学系3年)

---

私たちが Applied Computation in Bioengineering だと思って受けた授業は、おそらく違う授業であった。力学基礎よりも基本的な、高校で扱われるモーメントや力の話をされた。MATLAB を使って力の大きさを変化させるプログラムについて、for ループなどの説明があった。学生たちがプログラミングに対して、たくさん質問をしているのが印象的であった。(システム制御系3年)

## Natural Language Processing

ChatGPT のような自然言語処理技術が発達してきた中で、その理解に繋がると思い、受講を決めた。しかし残念ながら、これもスケジュールとは違う講義が開講されていた。実際

は金融学の授業であり、専門外でとても難しかったが、ショートヘッジやロングヘッジという、先物取引におけるリスク回避に関する授業であった。未修の内容を英語で受けることの大変さを改めて思い知ることとなった。

### **High Performance Materials**

物質の結合および結晶構造についての講義であった。講義の前半には結合距離とエネルギーの関係性について解説され、後半には様々な結晶構造が紹介された。紹介された構造の中には、日本の高校化学でおなじみの面心立方格子や体心立方格子もあった。この講義は修士向けのもので、自分の専攻とは異なる分野であったこともあり、ほかの講義よりも内容が難しく感じられた。

### **Mechanical Systems Design**

資料に書いてある講義室がどこかわからず、どこであるか電話で Beth さんに確認をした。その講義室に向かうと、グループワークに使われそうな講義室であった。しかし、授業が始まる時間であったのかかわらず、誰一人学生はいなかった。

### **Machine Learning**

機械学習を学ぶ上で必要な統計学に関する授業であった。この日は、先生が出校していないようで、ハイフレックス形式で講義を行っていた。2年生向けの授業ということもあり、確率に関する基本的な内容(条件付き確率・ベイズの定理・チェインルール)から確率分布に展開される形で、講義が進んでいった。日本では、ガウス分布のことを正規分布と呼ぶことが多いので、“Gaussian distribution”と言われたときに何のことを言っているのか一瞬、戸惑ってしまった。

### **Artificial Intelligence**

探索(Search algorithm)についての講義であった。講義内では、均一コスト探索(Uniform-cost search)、深さ優先探索(Depth-first search)、深さ制限探索(Depth-limited search)、反復深化深さ優先探索(Iterative deepening search)、双方向探索(Bidirectional search)について言及され、それぞれの探索時間や探索空間などが紹介されていた。自分が受けた他の講義と比較して受講者数が圧倒的に多かった。自分の専攻とは異なるため事前知識がほとんどなかったが、スライドがわかりやすく理解しやすかった。(生命理工学系 3年)

---

アルゴリズムやデータ構造に関する授業であった。人工知能に解かせる課題を 4 つの要素(States, Actions, Goal test, Path cost)によって評価することが最初の問題であった。そこでは、ルーマニアのブカレストから伸びるハイウェイを例に挙げた経路問題など、具体的な例題が用意されていた。情報系が専門ではない筆者にとっては難しい内容であったが、AI

のありがたみ分かる講義であった。(システム制御系3年)

### **Earth Processes for Engineering**

雲の生成や、降水の仕組みに関する授業であった。まずは、水の状態変化や飽和蒸気圧といった基本的な水の性質の理解から話が進んでいった。日本語においては、固体と気体の間で起こる状態変化を“昇華”とまとめてしまっているが、英語では固体→気体を“Sublimation”、気体→固体を“Deposition”と、使い分けて呼んでいて、意外なところで言語の表現力の差を感じた。後半は、熱力学的な内容に踏み込んでいて、物理的な観点から雨や雪、雹の生成過程の違いを説明していた。

### **日本語クラス**

用意されていたイベントの日程が直前になってなくなってしまうトラブルが発生し、その時間を使って、現地生向けの日本語クラスに参加することにした。参加したクラスは最上位レベルのクラスだった様で、流暢に話す学生ばかりであった。授業のテーマは男性言葉・女性言葉についてで、男女による言い回しの違いを理解しようという内容であった。特にLGBTの人が自身の自覚する性別を強調するために、強い男性言葉または女性言葉を使っていることがある、という内容が印象的であった。その例として、マツコ・デラックスが話す映像を視聴する時間があった。

## **5-3 研究室訪問 Lab tour**

### **Telstra Creator Space Tour**

メルボルン大学キャンパス内の東側にある Telstra Creator Space の見学をさせてもらった。Telstra Creator Space は東工大におけるものづくりセンターのような施設で、メルボルン大学の学生は、ここで3Dプリンターなどを用いた創作活動をおこなえる。施設の名前にある Telstra というのは、オーストラリアの大手通信メーカーの1つで、この施設は大学に企業が提携する形で運営されている。施設内の設備および作業スペースはとても充実していた。

### **Campus Tour**

メルボルン大学の学生および職員の方がキャンパスツアーをしてくれた。はじめはキャンパス内を歩き回っていたが、しばらくするとキャンパス外へと連れていかれ、戦争慰霊館や王立植物園を案内された。その後ヤラ川沿いを散策して、当初14時から15時までの予定であったこのツアーは17時半頃に終了した。かなりの距離を歩いたため、ツアーが終わる頃にはみんなヘトヘトであった。

## NIMS Lab Tour

NIMS(Nanostructure Interfaces and Materials Science) Lab の教授にラボツアーをしてもらった。見学前は東工大における材料系に近い研究室を想像していたが、実際は応用化学系や生命理工学系に近い研究室であると感じた。研究室内に置かれていた論文の1つが RNA の構造に関するもので、生命理工学系に所属する自分としてはかなり興味深かった。



図 35 Telstra Creator Space 内 (地下)



図 35 NIMS の実験室

## Teaching Lab Tour

私たちは3月8日(8日目)に、David Chan 教授との研究室見学を行った。このツアーでは、土木や建築に関する実験装置を見ることが出来た。レーザー光線を用いて流体の流れを調べる装置や造波装置、地震発生装置など、テレビや教科書でしか見たことのないような装置も見ることができた。私は、オーストラリアでは日本に比べて地震が少ないので、建造物の揺れに対する関心は少ないものだと思っていた。しかし、地震だけでなく風による共振運動も建造物を大きく揺らす可能性のある要素だと知った。そこで改めて、世界での耐震設計の重要性を知ることが出来た。

上記以外にも、河川の生成や降雨の様子を再現できる装置など、視覚的に分かりやすい装置が並んでいたのので、専門外の学生でも楽しめる内容であったと思う。

## CAREN Lab Tour

私たちは3月10日(10日目)に、Beth さんの同僚である Louisa Tobin さんと研究室見学に行った。ここには、半筒状の大きなスクリーンとベルトコンベアで作られた実験設備があった。この装置の周りには沢山のセンサーが付いていて、体にマーカを取り付けた人の姿勢をキャプチャーすることが出来る。スクリーンには、様々な映像を映し出すことが出来て、

シチュエーションに応じた人体の姿勢を解析することが出来るようになっている。私たちも実験を体験させてもらったが、ゲームのような感覚で、とても楽しむことが出来た。



図 36 CAREN Lab Tourの様子

#### 5-4 その他

##### (1) Tokyo Tech Information Session について

渡航してから一週間後の 3/8(木)13:00~14:00 に Tokyo Tech Information Session が行われた。Zoom で授業をするためのカメラがついた小さい部屋で発表をした。教室には、メルボルン大学の学生は来ておらず、Zoom に 2~3 人入っているかもしれないという形であった。メルボルン大学の学生が見に来てくれると思い、複数個所で問いかけの内容を入れていたため、実際に話を聞くことができなかつたのが切なかつた。Beth さんが録画をしてくださったみたいなので、日本に興味がある学生が後ほど見てくれれば良いなと思った。現地発表の内容については、Get to know us from Japan という題名をつけ、日本や東工大についての説明をした。構成としては、日本の基本的な情報について説明した後、東工大についての説明をし、日本についてより詳しく説明をする形にした。最後に、日本人から見たオーストラリアの印象を説明し、次は日本の印象について教えてくださいという形でプレゼンテーションを終わらせた。以下に、現地発表の詳しい内容について記す。

##### 1. Basic information about Japan

オーストラリアと比較したときの日本の面積、人口、人口密度などの基本的な情報について説明をした。

##### 2. About Tokyo Tech

東工大には 6 つの学院があるということや、本館や Taki Plaza の説明をした。また、東工大出身のノーベル賞受賞者として、大隅良典さんがオートファジーのメカニズムを説明したことを話した。

### 3. Tokyo Tech Club activities

東工大の特色のある部活動・サークル活動について説明をした。東工大らしいサークルであるロケットサークル CREATE と、国際交流を行っている SAGE について説明をした。CREATE については、ロケットを発射する瞬間の動画とロケットに内蔵したカメラから撮った動画を入手し、発表の場で再生した。

### 4. Tokyo Tech Labs

学士4年生のメンバーが、自分の所属する研究室について説明をした。オーストラリアには、日本にあるような研究室の制度がないということであったため、研究室がどのようなものであるかということから説明をした。どのような研究をしているのかということだけではなく、1日のスケジュールや、どのようなイベントがあるのかということまで、写真を掲載して詳しく話した。

### 5. Tokyo

東京が日本の首都であり、経済や文化の中心であるということを説明したうえで、東京の名所を紹介した。伝統的な日本を感じることできる浅草と、現代的な日本を感じることできる渋谷の二か所について説明した。

### 6. Transportation in Japan

東京の交通から入り、日本全体の交通について説明をした。東京には18社からなる85もの線が存在することや、新幹線がいかに早いかということについてクイズ形式を使いながら説明をした。

### 7. Japanese food

日本食について、和食や一汁三菜、うまみについて説明をした。また、具体的な日本の食べ物について、寿司はすでに多くの人が知っていると思われたため、納豆を紹介した。

### 8. Japanese Traditional Events

1年間の中に日本ではどのような行事が存在するのかということを紹介した。正月、節分、七夕について説明をした。

### 9. Japanese animation

日本のアニメは海外でも人気であると思ったため、アニメについて説明をした。その場にいる学生に何か知っているアニメはないか聞く予定であったが、学生がいなかったため聞けなかったのが残念であった。有名なアニメと、オーストラリアでも放送される予定のアニメについて説明をした。

### 10. Traditional Japanese sports

日本の伝統的なスポーツとして、柔道、剣道、相撲を取り上げた。その中でも、あまり知られていないと思われる相撲について、82個もの技があるということなどを説明した。

### 11. Interesting things in Japan

献血が好きなメンバーが、献血について説明をした。日本の献血ルームでは、お菓子や

飲み物が飲めたり、漫画を読んだりすることができることを紹介した。

## 12. The Japanese Perspective on Australia

日本人がオーストラリアについてどのような印象を持っているのかということをお話した。東工大生にインタビューをした動画を、英語字幕をつけてその場で再生した。

### (2) 学生との交流について

Campus Tour の主催者であるメルボルン大の学生がご飯を誘ってくれた。Campus Tour にいた学生 2 人と、日本の大学から派遣交換留学で来ている日本人学生とともにご飯を食べた。同じ授業を取っていたからという理由でその日本人学生を呼んだようであり、その関係のフランクさに驚いた。3 人のうち 2 人は全く面識がなかったようで、海外ではこのような場を通じて知り合いが増えていくのだなと感じた。英語でたくさん話しかけてくれたため、英語を使ういい機会になった。うまく伝えることができない場面もあり、もっと話せるようになりたいと多くの学生が感じていたようであった。



図 37 Campus Tour の主催者との食事



## 6. その他

### 6-1 メルボルンの街の様子

#### (1) 街の様子

メルボルン市内を見て最初に感じたことは統一感の無さであった。古風な建物から近代的な建物まで多種多様な建物が溢れていた。工事中の建物が多いことや、大学の一部で改装工事をしていたことから現在進行形で街が変化しているということを強く感じられた。道路は綺麗に整備されていてかなり先進的であると感じた。碁盤の目のように道が広がっているため場所を覚えやすかった。トラムという特殊な交通機関がありながらも道幅が広いためトラムが渋滞の原因になることもなく安全性も高い便利なものであると感じた。また多様性に富んだ街であるとも思った。メルボルンを象徴するハンバーガーショップやカフェはもちろん、そのほかにもアジア系の飲食店や地中海料理など様々な飲食店があった。毎週水曜日の夜に行われるナイトヴィクトリアマーケットでは国ごとに屋台が出ていて、普段と比べより様々な国の料理を楽しむことができた。建物や人々からはもちろん、イベントごとなどからも文化が融合されていることを感じ取ることができた。



図 39 Night Victoria market のアフリカ料理 (左) とスペイン料理 (右)

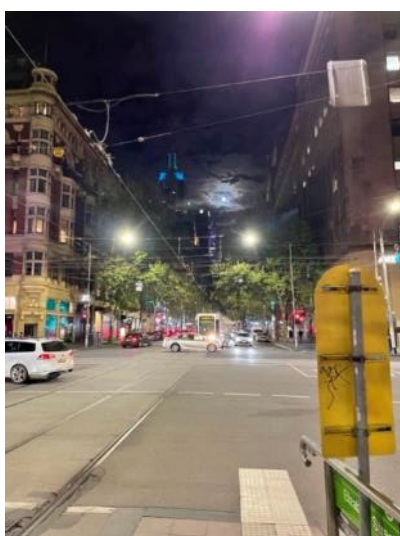


図 4038 メルボルン市内の様子

## (2) トラムの様子

メルボルンの市内にはトラムが走っていて、市内の移動を楽にする交通手段となっている。メルボルンのトラムにはフリートラムゾーンがあり、範囲内では無料でトラムが乗り放題になっている。しかし、この範囲を出て乗ってしまった場合、稀にある車内での抜き打ち調査で罰金 (A\$200) が科されるので注意する必要がある。トラムを実際に使ってみると分かるが、意外にもこの範囲は小さい。シティの南を流れるヤラ川を渡ってしまえばそこは範囲外であり、さらにはメルボルン大学や、メルボルン博物館の最寄り駅は範囲外であるので注意が必要である。幸いなことに私たちが罰金を科されることは無かった。フリートラムゾーンを出るときはタッチしてから乗ればいいのだが、時間料金で、2時間料金 A\$4.6、それを超えると1日料金 A\$9.2 がかかる。少しだけゾーンの外に出るときは、ぎりぎりゾーン内の駐車場で降りてから歩くのがいいだろう。

トラムにもいろいろな種類があり、1~3両編成で、1両のトラムに乗り込もうとするときは大混雑するので私は外れくじだと感じていた。逆に3両であれば、ある程度余裕があるので快適であった。トラムの車体は基本的には緑色であるが、車体に広告などのラップが施されているものも多かった。私が写真に収めることができたものを示す。

外国の電車は時間に正確でないという意識があると思うが、トラムはほとんど時間に正確に走行している。とはいってもフリートラムゾーン内は頻繁に走っているので山手線のように時刻表を気にしなくても来たものに乗ってしまうというのでいいだろう。

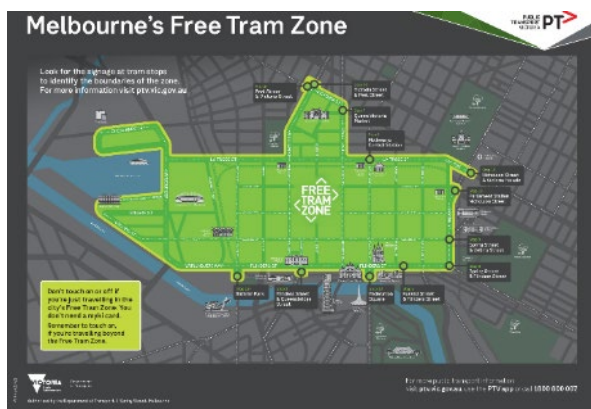


図 40 フリートラムゾーン



図 41 いろいろなトラムの外装（写真に収められたもの）

## 6-2 メルボルンの食事

私たちはホテルで10泊の素泊まりであったために、すべての食事を自分で用意しなければいけなかった。それは少し大変なことであったが、現地での暮らしを体験するという意味があるものと思って、毎食探すのを楽しんでいた。ここでは私が朝食、昼食または夕食にどのようなものを食べていたかを紹介する。また、メルボルンはカフェが有名な街であるようで、私が行ったカフェを一部紹介もする。大体1食満足いくまで食べようとする、A\$20前後、カフェでlatteやcappuccinoを1杯飲もうとするとA\$5前後かかることは割り切っておく必要がある。

### (1) 朝食

朝食も基本的に各自で用意しなければならなかった。私たちの部屋では1日目にシリアルとドライフルーツと牛乳を買って、数日はこれを食べることにした。シリアルがなくなった後はヨーグルトと生の果物を食べることにした。生の果物はどれもおいしく、私はマンゴーとリンゴとバナナしか食べていないが、他の留学メンバーの話ではラズベリー、イチゴ、

パイナップルもおいしかったと聞いた。何を食べればいいのか分からなくなったら果物を選ぶと、はずれは無いであろう。

基本的には上述したようなものを食べていたが、朝に時間があるときには外で食事をとることにした。

### LUNE

この店は世界一のクロワッサンと言われる、クロワッサンが有名な店であり、そのことを知っていたメンバーのおすすめから、留学メンバー全 12 人で行った。店内はあまり広くなかったので、ヤラ川沿いまで移動して食べた。クロワッサンは一つ一つ大きかったが、おいしかったので、軽く 2 つ食べきってしまった。



図 43 LUNE のクロワッサン

### Seven Seeds Coffee Roasters

この店はメルボルンのカフェの中でも有名な店で、この店にもメンバー全 12 人で行った。私は Cappuccino と Apple oats を注文した。Apple oats は甘さ控えめで生の果物が乗っていて健康的な食事を感じた。とてもおいしかった。皆それぞれが好きなものを注文したのであったが、どれもおいしそうであった。メニューは下の URL から見られる。

<https://sevenseeds.com.au/pages/seven-seeds-carlton>.



図 44 Seven Seeds で食べたモーニング

### The Boatbuilders Yard

ここは私が朝歩いている時に雰囲気良さそうな店だったので入ってみた店である。私は Egg & toast と Mocha を頼んだ。その後、席についてしばらくしていると、前方から Egg & toast が後方から Mocha が同時に机に運ばれてきて、驚いた。食事を作る人とコーヒーを作る人が分けられているようである。それだけコーヒーを大切にしているのであろう。



図 45 The Boatbuilders Yard でランチ

## (2) 昼食・夕食

昼食・夕食の区分にしたが朝食以外の食事の中で印象に残っている食事を書いていく。

### Hoho's Canteen

このお店は初めてメルボルン大学に行ったときに昼食として食べたに行ったお店で、このお店ではパンで具材を包んだものが売られていたが、私は Halloumi Zaccacia というものを食べた。Halloumi はチーズのことで Zaccacia というのはルーマニア料理の一つで簡単に言うとピザを半分に折ったようなものであった。日本ではあまり食べたことが無い味に感じたのであったが、決して不味くなく、むしろとてもおいしかった。



図 46 大学に行った初日の昼ご飯—Zaccacia—

### Royal Stacks

この店はシティにあるハンバーガーの店で、メルボルンで食べたハンバーガーで最もおいしかったと感じている。実は私はこの店を2度訪れている。1度目は Double Stack、2度目は Saint を注文した。この店のバーガーは肉が分厚くとても食べ応えがあった。どの店のハンバーガーにも言えることであるが、ソースにこだわっているようで、店ごとに違うおいしさが楽しめるので、色んな店のハンバーガーを食べることをお勧めする。ただ、Hungry Jack というチェーン店があるが、これは日本でいう Burger King と全く同じであることには注意してほしい。



図 47 Royal Stacks はリピートした（左；Double Stack、右；Saint）

### Surf Grill

Middle Brighton 駅の近くにあるハンバーガー店で、ブライトンビーチで夕日を見ながらハンバーガーを食べようと選んだ店である。おじさんのワンオペの店のようで、頼んでから調理し、出来上がるまで 20 分近くかかったのが危うく夕日を見逃すところであった。しかし、できたバーガーは一級品で特に玉ねぎが甘くなるまで炒められていて、ソースと野菜やパティの相性が抜群で、夕日を見ながら食べられたことで、さらにおいしく感じたと思う。ただ、ビーチで何かを食べるのには注意が必要で、カモメがすぐに寄ってくる。カモメが寄ってきてしまうとしっかりと味わえなくなってしまう。



図 48 ブライトンビーチとハンバーガー

これ以上紹介していくときりがないので、一つ一つ簡単に紹介していく。

左から、Grilled のハンバーガー、Shanghai Street という店の小籠包と炒飯と焼きそばのようなもの、Stokers Fine Pancakes のパンケーキである。Grilled はチェーン店のように、いろいろな場所にあるが、ホテルの近くにあった Southern Cross 駅の Grilled で食べた。野

菜が多めのバーガーで肉汁が多く、肉汁とソースの相性が良かった。Shanghai Street は中華料理屋で、リーズナブルでありながらおいしいお店であった。最後のパンケーキの店は3人で行ったのだが、時刻は22:40。日本でも流行りそうなパンケーキの形でとてもおいしかった。分厚いクレープ生地を折りたたんだようなものであったが、この時間に食べるものでも、量でもなかったのので、注意してほしい。因みにこのときの閉店時間は23:30らしい。



図 49 左 ; Grilled、真ん中 ; Shanghai Street、右 ; Stokers Fine Pancakes

下の画像は、左から、ギリシア料理とメキシコ料理である。このギリシア料理は Stalactites Restaurant という店の料理で、ここで初めて Lamb を食べた。右は Guzman y Gomez という店の料理で、これは A\$12 くらいだった。この料理では肉の種類を自分で選ぶことができるようでそんな注文は初めてであったので良く分からず、メニュー表の一番上にあった鶏を選んだ。この店では A\$3 タコスも売っていた。友達は「スリーダラータコス！！」で買っていた。



図 50 左 ; Stalactites Restaurant、右 ; Guzman y Gomez

次の画像は左から、フォーと Fish & Chips である。左のフォーは Pho Bo Ga Mekong Vietnam という店の定番で、初日の夕食として、引率教員のはばきさんにメンバー全員連れて行ってもらった。当然お代は自分持ちだ。右はグレートオーシャンロードツアーの道中で

George's という店で食べたもので、正確には Salad, Fish & Chips である。Chips がいらなければ、Salad & Fish というものもあったのでそちらを選ぶといい。



図 51 Pho Bo Ga Mekong のフォーとツアー中の Fish & Chips

### (3) カフェ

あまり知られていないが、オーストラリアは高品質のコーヒーの産地として注目されている。メルボルンでの滞在中は 1 日 1 カフェを目指して過ごしていた。ここでは私の訪れたカフェを簡単に紹介していく。ここでは 3 つだけ取り上げたが、メルボルンにはまだまだおいしいカフェはたくさんあり、行きつくせないほどであった。

#### Dukes Coffee Roasters

フリンダースストリート駅に近いところにあるカフェで、飲食店が立ち並ぶ表参道のような通りにある。店内は、店員のプライバシーの確保と最上の品質のコーヒーを提供するために撮影禁止となっている。

#### Market Lane

メルボルンに数店あるカフェであり、焙煎士が日本人ということで有名である。下の画像のようなラテアートは多くのカフェで行ってくれる。

#### Brother Baba Budan

Seven Seeds の系列店であり、提供されるものは Seven Seeds のものと一緒だと思われるが、このカフェは内装が特徴的で、天井にいくつもの椅子がぶら下がっている。これを目当

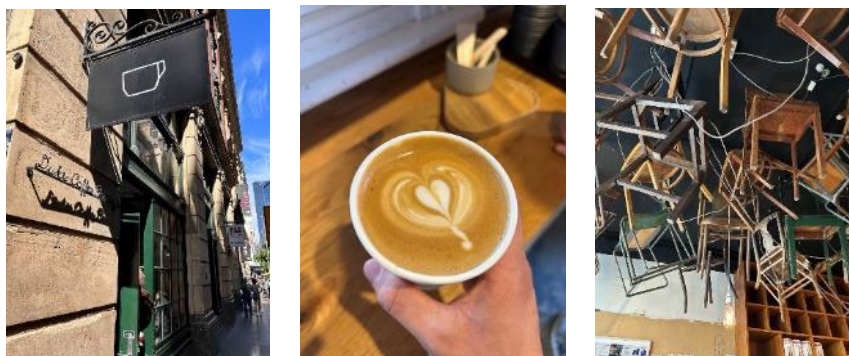


図 52 左 ; Dukes Coffee Roasters、真ん中 ; Market Lane、右 ; Brother Baba Budan



てにくる観光客も多いようである。

### 6-3 メルボルンのお土産

#### T2のお茶

T2は日本未入荷のメルボルン発の紅茶ブランドで、フレーバーティーの種類が豊富であった。私は無難に Melbourne Breakfast を選んだが、どれがおいしそうかは下調べしていくといいかもしれない。因みに Melbourne Breakfast はバニラフレーバーである。

#### Koko Black や Haigh's Chocolate のチョコレート

Koko Black と Haigh's Chocolate の2つのブランドはオーストラリアのチョコレートの専門店で、日本に輸出されていない。どちらも高級なチョコレート売っているお店であり、Haigh's Chocolateの方が若干お値段が張る印象であった。食べ比べをする金銭的余裕がなかったのではどちらがいいかは分からない。



図 53 Koko Black の内装

#### ワイン

意外にもオーストラリアのワインは世界中で高評価を得ている。引率教員のはばきさんにワインの選択について教えていただいた。私は荷物に余裕がなく、ワインはあきらめたが、現地で飲んだワインはどれもおいしかった。おいしいワインを選びたいときはA\$10以上の少し高いワインを選べば間違いなさそうである。

## ぬいぐるみ

カンガルーやコアラのぬいぐるみはオーストラリアに行った思い出としてずっと残っていくものであろう。私はフィリップ島でペンギンのぬいぐるみを、Queen Victoria Market でコアラとカンガルーのキーホルダーを買った。Queen Victoria Market では比較的安くぬいぐるみが手に入るのでお勧めであるが、モノによって質が悪いものがあるので注意しなければいけない。



図 54 ぬいぐるみ

## メルボルン大学グッズ

メルボルン大学にある Visitor Center で売られている。Tシャツ、スウェット、パーカー、ジャケットが人気ようで私もパーカーを購入した。今回の留学メンバーの中には家族へのお土産用も含めて A\$350 ここで消費した人もいた。メルボルン大学のエンブレムがかっこいいので普段使いしても違和感ないものだと思う。



図 55 メルボルン大学のロゴ

## Timtam

オーストラリアの定番のお土産であろう。日本でも KARDI などでも買えるようであるが、日本では手に入らない種類がオーストラリアで売られているらしい。私も探したが、それに出会うことはできなかった。

## KitKat



図 56 日本で売られていないオーストラリアの KitKat

今回の留学メンバーから KitKat のフレーバーにオーストラリアでしか売られていないフレーバーがあると聞いた。調べてみると、Southern Australian Orange と Tasmanian Mint がオーストラリアの味として 2021 年から売られていると分かり、近くにスーパーで買い求めた。

## 7. 所感

### 融合理工学系 学部2年

今回の派遣プログラムに参加して、改めて、外国の良さを思い知った。もともと、メルボルンが住みやすい街だということを知っており、メルボルンを訪れてみたいと考えていた。実際にメルボルンを訪れてみて、なぜ住みやすい街だと言われるのかということがわかった。私がメルボルンの素晴らしい点だと感じたこととしては、街中に緑があふれていたり、Free Tram Zone でトラムに乗り放題であることであったり、他民族国家であるために様々な人種の人が街中を歩いていたりすることだ。私は、様々な国を訪れてきたが、ここに住みたいと思ったのは初めてであった。いつか、もう一度メルボルンに戻ってきたいと心から思った。

私は、メルボルンに行き、メルボルンの人々のやさしさやフランクさを感じた。トラムに乗っているときに、当たり前のように若者がお年寄りに席を譲り、そこから会話が始まるという場面を何度も見た。日本では、見ず知らずの人と会話をするということのはめったにないと思うため、そのような些細なことで会話が始まるのが楽しいと感じた。また、どこのお店の店員さんも優しく丁寧に対応してくださって、英語が聞き取れないときにも嫌な顔せず ゆっくり言い直してくれた。英語に関することとしては、オーストラリアは英語のなまりがあるのかと思っていましたが、ほとんどなまりは感じられず、私が会話した人々の英語はとも聞き取りやすかった。

私は、大学3年生のときに派遣交換留学に行こうと考えているが、その前の海外体験として、素晴らしい経験になった。このプログラムを終えて、留学がさらに楽しみになった。メルボルン大学で授業を履修できたことで、外国で行われている授業がどのような形であるのか、少し知ることができたと思っている。また、このプログラムを通じて、東工大における知り合いが増えただけではなく、メルボルンで様々な人と出会い会話することができたことが、一生の財産になると感じた。

### システム制御系 学部2年

私は今回の派遣プログラムで一番感じたことは英語をもっとできるようになりたいという思いです。メルボルン大学の授業ではスライドが何を書いてあるか読み取ることはできました。しかし先生がそのスライドをもとに何をどう説明しているのか聞き取ることはあまりできていなかったと思います。また現地の人との交流では自分から進んで話かけに行くことはできたものの、もっとうまくコミュニケーションがとりたいなと思ったり、何度も自分の言いたいニュアンスが本当に伝わっているだろうかと考えたりする場面が多々ありました。正直に言うと結構悔しいと感じました。それでも私は自分で挑戦してみたのになんか悔しいという気持ちが派遣プログラムで得た一番大切なものではないかと思っています。この気持ちがあるからこそこれから英語の勉強を頑張ろうと思えるし、もう一度留学を

してみたいと前を向くきっかけにすることができます。私はまだ大学二年生なためにプログラムに参加する機会はたくさんあるので、この気持ちをばねに自分から行動ができればいいなと思います。また初めてオーストラリアに行ってみて、都心ではトラムの利用によって排気ガスを減らす取り組みや空港やスーパーでの無人化の取り組みといった日本と比べて優れている点や進んでいる点を知ると同時に、やはりオーストラリアとは異なる日本の良さを実感することができました。もっといろいろな国に行って新たな視野を手に入れることが出来たらその経験をもとに自分の分野で活かすことができ、自分の強みになると思います。また一人ではなくみんなで参加したことによって周りにたくさん助けをもらい、より楽しい思い出にもなりました。共に生活することでこの人のこういうところをまねしたいと思ったり、こういうところは自分にはないと感じる場面があったりして多くの刺激が得られました。このように学年や選考や性別の垣根を越えて取り組むことの面白さを知ることができました。これから私はこのプログラムを自分の中の出発点にして新たなことにチャレンジしていきたいです。

## 融合理工学系 学部2年

今回の超短期派遣プログラムを経てメルボルンの寛容的な人々の雰囲気や様々な文化が混ざり合った町の雰囲気を知ることができた。有名な建物や博物館や自然など様々なものを見て回ったが、グレートオーシャンロードなどの自然を感じられる場所が好きであると改めて感じた。次は北欧などの自然豊かな国に行ってみたいと思った。メルボルン大学の授業に関しては、内容自体は大差ないと思うものが多かったが制度自体が少し違うようであった。メルボルン大学の授業は東工大に比べ糸科目あたりの時間数が多いということであった。そのため1セメスターあたりの履修する授業の数は4個とかなり少ない。これはAcademic Englishという授業を受けた際に近くにいた学生から教えてもらったことであるが、授業は講義を聞くレクチャー、抗議について議論するチュートリアル、実験や工作を行うワークショップの3つから構成されているとのことであった。授業によって配分は違うようである。運よくAcademic Englishのチュートリアルを受けることができたがとても新鮮で楽しかった。これと比較すると東工大の授業はレクチャーとワークショップに相当するものがほとんどであると思った。東工大には一部の科目に対して演習という科目があるが特に生徒同士で議論するようなことはないのでチュートリアルに相当するようなものはないと思った。チュートリアルという授業方式はとても意味が感じられ面白いと思ったのでこのような授業方式を強く取り入れている大学に留学したいと思った。このように海外の大学に関して気付いていないことや知らないことはまだまだあると思うので、いろんな側面から自分に合った環境を見つける努力をしようと思った。学士4年の時に二ヶ月以上の留学ができると良いと思っている。留学という形かインターンシップという形か特に決めていないがどのような環境で学べるのかに重点を置いて留学先を探そうと思う。

## 情報工学系 学部2年

まず、このプログラムを通してメルボルンという街の魅力と日本との違いを大きく感じた。その中でまず、様々な国籍の人がメルボルンで共に暮らしているということが一番大きな違いであると感じ、同時に魅力的であると感じた。行く前はアジア人の私たちは文化的に馴染みにくいのではないかと思っていたが、中国人をはじめとする多くのアジア人がメルボルンで暮らしていたため、食事、街の雰囲気などが馴染みやすかった。日本ではやはり日本人が多く、多国籍という文化ではないため、様々な場面で刺激を受けた。多文化共生という環境を経験できたことは国際化に興味がある私にとって、このプログラムに参加して良かった点であると思う。

また、メルボルンではキャッシュレス化がとても進んでいた。日本では現金決済がまだ主流であるが、メルボルンではほぼ全ての店がキャッシュレス対応をされており、逆に現金が使えない店もあった。この点で日本の電子化の普及の遅れに危機感を感じた。理系の学生として日本の決済方法を直接変えることは難しいが、将来企業で働いた時に今回の経験を参考に、より便利で日本全体に浸透しやすい仕組みなどを考えてみたいと思った。

そして、今回の超短期派遣プログラムに参加したことで、今後長期での留学プログラムに参加しようと意思が高まった。その一番大きな理由として、様々な国籍の学生が共同で研究する様子を見ることができたことが挙げられる。東工大でも留学生はいるが、どうしても交流する学生の大多数が日本人となってしまう。メルボルン大学を見学し、色々な文化背景を持った学生が同じ場所で学んでいる様子を見て、このような環境で学ぶことで自分だけでは得られない知識、アイデアを得られると感じた。

また、海外留学をする目的として、より高い技術を学ぶためという点があったが、今回のプログラムを経験して、留学をすることで自分の専門分野だけでなく、異文化交流やコミュニケーション能力など得られるものはとても多いことを改めて感じる事ができた。

## 生命理工学系 学部2年

今回のオーストラリア超短期海外派遣プログラムは私にとって久しぶりの海外であり、とても充実し有意義な12日間であった。メルボルンの市内についてもメルボルン大学についても驚くことがたくさんあった。

メルボルンの市内については、空港からメルボルンの中心地に向かっている時に、高層ビルが多く集まっているところが見えてきて、日本の丸の内のようなビルが立ち並んでいる都市であることを想像した。しかし、いざ中心街に着くと、高層ビルももちろんあったが、歴史的な建物が多くあったことに驚いた。また、メルボルンの市内はまだ建設中の高層ビルも多くあり、地下鉄を現在作り進めていることから、今後さらに発展して住みやすくなるのだろうと思った。メルボルンは想像をしていたよりも治安が良く、住みやすい街と言われて

いることが納得できた。街中は日の入りが 8 時頃であることもあって、夜になっても明るく賑わっていた。ナイトマーケットやお祭りに行く機会があったが、多くの人で賑わっていたこと印象的であった。

メルボルン大学については、授業を受けた際、みんな真剣に授業を受けていたことや授業中や授業後に教授に質問をしている生徒が多くいたことがとても印象的であった。大学の施設が充実していることもあり、学生たちが能動的に学んでいるように感じた。また、メルボルン大学には、現地の学生だけでなく、留学生が多かったことも印象的であった。特に中国の人が多く、街中や大学内でも中国語が多く聞こえてきた。同様に、街中では洋食だけでなく日本食という名のすし屋、中華料理、韓国料理、メキシコ料理、ベトナム料理など様々な国の店があって、国際色豊かな都市であると思った。

今回のプログラムを通して、私は英語力を高める必要性を感じたのと、長期留学への興味を強く持った。自分の英語力は現地の人と想像以上にコミュニケーションをすることができ、現地で最低限の生活をするには大丈夫だと思った。しかし、時々言いたいことがパッと出てこなかったり、早口で言われたら流してしまったりすることがあった。そのため、今後の留学をする機会に備えて、さらに英語を勉強して英語力をさらに高める必要があると感じた。また、日本語クラブとの交流会では、日本からメルボルン大学に 1 年留学に来ている人と話す機会があった。私は高校生の時から海外留学に興味があったため、実際に日本から長期留学をしている人の話を聞いていて、長期留学がとても魅力的に感じた。現地の大学で授業を受講したり、研究室を見学したり、メルボルン大学の学生と交流をしたりして、現地の生活を体験したことで、自分も長期留学をしたいと強く思うようになった。今後は東工大での勉学を励むだけでなく、長期留学を視野に入れて行動していきたいと思った。

私はこの超短期海外派遣でとても貴重な経験ができた。これほど長い期間を海外で生活することは初めてであったが、大きなトラブルもなく過ごすことができて良かった。今回の留学で感じたことを忘れずに、これからは自分から進んで行動していきたいと思った。また、さらに英語力を高め、今後の長期留学に繋がりたいと思った。

### システム制御系 学部 3 年

私は 6 年前にもオーストラリアに短期留学をした経験がある。その経験との違いを比較しながら、今回の研修の所感を述べたい。

まずは、都市の違いだ。以前はシドニーに訪問したが、今回の訪問先であるメルボルンはシドニーとは大きく異なった印象を受けた。街の発達度や市民の様子を見ると、メルボルンには、未だ発展途上な部分が残されていると感じた。空港から市街地に進むバスの中からは、建設中のビルの工事が多く見られるし、街中ではよくホームレスを見かける。これらはシドニーでは、あまり見られなかった光景だ。これだけを聞くと悪い印象を受けるかもしれないが、そんなことはない。メルボルンには、シドニーにないような伝統ある建築物や、多国籍な雰囲気が漂っていて、観光地としてはメルボルンの方が楽しめるのではないかと思う。

次に、ホームステイとホテル泊の違いだ。ホームステイでは、ホストファミリーが色々なところに連れて行ってくれたり、日常会話を楽しんだりすることが出来る。一方で、ホテルにはそのような要素はない。しかし、ホテル泊で滞在すると自由な時間が多く、時間の使い方次第では有意義な滞在にすることが出来るだろう。そのためには、事前に行先や交通について調べておくことが重要で、今回の超短期派遣では、その点の準備不足を感じたので今後の反省点としたい。

以上のような違いを感じながら今回の滞在を終えた。12日間と聞くと一見短いように感じてしまうが、メルボルンという都市で学生として生活することをイメージして、それが自分自身にとってマッチしたものかどうなのかを判断するには十分な期間であったように感じる。今後も国際交流や海外滞在を経験して、自分なライフプランを決定する材料としていきたい。

### 生命理工学系 学部3年

私は「大学時代にやりたいこと・成し遂げたいこと」という目標をメモ帳に書いていた。その中の一つが、留学プログラムに参加することだった。今回参加することを思い至ったのは、そもそも学部1、2年ではコロナ禍によってグロ理のプログラム自体が無かったために身近に参加する機会がなかったのだが、今夏（2022年夏）からグロ理の留学プログラムが再開したことにある。そして、私自身の今後数年間の計画を考えてみたときに、この春休みに開催する超短期派遣プログラムが、絶好の機会だと分かり、申し込むことにした。

今回のメルボルン大学で受けた講義が、初めての海外で受けた大学の講義になった。最も印象に残っている講義が Artificial Intelligence の講義だ。内容は Uninformed search strategies という初見の話題であったために、理解に苦しんだ。講義をする先生はかなりゆっくり話し、講義中にはスライドの空欄を埋めるために隣の人とのちょっとした話し合いの時間があつた。ここまでは日本でもありがちな光景だが、やはり、学生の積極性が日本と違う。質問があればいつでも質問する、疑問をその場で解決する意識の違いだろう。ここは見習わなければいけない。

私が海外に行くときにはその国の街並みや人の雰囲気大切にするようにしている。メルボルンの街には様々な国籍の人が住んでいるようで、行きかう人々は東アジア系、アラブ系、インド系、ヨーロッパ系、アフリカ系と様々で、何系が多いというのはなかったように感じた。そして、いろいろなルーツのある人が住んでいるためか、現地に住む人々は外国人に対して寛容だと感じた。それはお店で注文するときによくわかる。私が1つオーダーすると、オプションの選択が必要な場合がある。その時、店員さんが何を言っているか分からなかったので聞き返すと、必ず店員さんは少し簡単な英語をゆっくりと話してくれた。また、私の変な英語でも意図を汲み取ってくれて、難なく注文することができた。この寛容さから私はメルボルンを安心して住みやすい街だと感じた。たまに変な人を見かけるかもしれないがそれは東京でも同じことで怖がる必要はない。夜中に数人で出かけたときに、一度べろべ



ろに酔った女性に肩をたたかれて何か言われたが、これもさほど怖くない。恐怖感は何日本でも経験するものと変わらない。夜中に出歩かないほうがいいとは思いますが、危険だからやめた方がいいとは思わないくらい安心の街だった。

この10日間で英語ができるようになったとは全く言えないが、自分の英語が現地の人に意外と伝わるのが分かったこと、現地で生活するというのはどのような雰囲気なのか、つまり、意外と生活できそう、というのが多少なりとも分かったことがこの10日間の最大の成果だと思う。メルボルンから帰国するとき、日本に戻りたくなかった。さらに、日本に着いたらメルボルンに戻りたいと思った。こうして留学が生活面ではそれほど高いハードルではないと分かった今では、長期の留学をしてもいいのではないかと考え始めたところだ。

### 生命理工学系 学部3年

私は今回の留学プログラムに参加する前から何度か海外に行ったことがあったが、それはすべて家族との旅行であったので、現地の人とコミュニケーションをとる機会がそれほどなかった。そのため、私は今回の留学プログラムをこれまでの海外旅行とは全く別のものとして感じられた。

留学前は、自分の言いたいことをスムーズに英語で伝えられるかというところに特に不安を感じていたが、実際に現地でコミュニケーションをとってみると、そもそも自分のリスニング力不足で何を聞かれているのか理解できないがために、自分が話すところまで至らないというケースが多かった。その結果として、現地人とのコミュニケーションに対して消極的になってしまった。日本では経験できないようなコミュニケーションの機会を活用しきれなかったことに、少なからず後悔を感じてはいるものの、日本にいただけでは気づけないような自分の英語力の課題に気づけたという点においては、有意義な経験ができたと思っている。今後より長期的な留学をしたいということ自体は今回の留学に行く前から考えていたが、それに向けての英語力強化のモチベーションは留学前から格段に高まった。

また、今回の留学を通して、会話の中で相手に自分への興味を持たせることの難しさを実感した。相手に興味を持ってもらうためには、自分の話す言語そのものの質を向上させることが必要なのはもちろんであるが、それ以上に会話の内容の方が重要であると感じた。言語自体の質に関しては、ジェスチャーなどをしながら一生懸命伝えようと努力すればある程度はどうにかなったが、様々な事柄に対する自分自身の意見や考えを持っていないと会話に詰まってしまうことがあった。このようなことは、日本ではまず感じられないので、すごく新鮮な経験だった。

最後に、今回の留学プログラムの実施に向けてご尽力いただいた東工大およびメルボルン大学の教職員の方々に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

### 材料系 学部4年

メルボルン大学について、大学構内には意匠を凝らされた建物が多く、広い構内を探検し

ているだけでも楽しかった。いたるところにカフェがあり、レストランがあり、緑があった。そこで過ごす学生たちは大学で非常にリラックスして生活していた。芝生で寝ていたり、図書館の奇抜な椅子に座って勉強したりする様子が見られた。東工大では、大学でそのように過ごす生徒は少ないと思う。育ってきた文化、大学の雰囲気の違いを感じた。プログラムのラボツアーでは、いくつかの研究室を周った。その中で、自分と似た専攻の研究室も見学させていただいた。おいている機器や薬品など、自分の研究室とほとんど変わらないように見えた。研究には国内外の差があまりないのかもしれない。しかし、メルボルン大学の研究室は広く、一つのフロアにたくさんの装置が置いてあった。そのため、使用する装置ごとに階を変えなくてはいけないような、小さなストレスなく研究できそうだった。

メルボルン市内について、メルボルンは非常に治安が良い、ということが最も印象的だった。今回、私は初めて海外の街を歩く経験をした。そのため、到着当初はスリや犯罪に巻き込まれないよう強く気を張っていた。しかし、現地の人を観察すると、リュックが少し空いたままトラムに乗っていたり、カフェで自分のバックを置いたままどこかに行ったり、犯罪とは無縁なような安心して生活する様子が見られた。また、メルボルンはごみ箱が多く設置されていた。コーヒーを買ったはいいものの、紙コップをどこで捨てるかという問題に当たったことがある人は多いと思う。メルボルンではゴミ箱が多くありそれを考える必要が全くなかった。街も綺麗に保たれ、生活者もありがたい、日本でもゴミ箱がもっと増えればいいのに、と思った。

今回のプログラムでメルボルンを訪れたことは、私にとってとても素晴らしい経験になった。海外の大学の経験、海外での街歩きなどだ。外国の他の街に比べてメルボルンは特殊かもしれない。しかし、メルボルンに行ったことで他の場所にも赴いてみようという気になった。自分の進路選択の幅が広がった気がする。

#### 材料系 学部4年

私は、大学入学時から海外留学に興味を持っていたものの学士2,3年はコロナ禍により留学プログラムを行えない状況が続いていた。しかし、今年プログラムが再開され、海外留学に挑戦する最後の機会になるかもしれないと感じ、このプログラムへの参加を志願した。

まず、メルボルンについて今回の活動を通して強く感じたことは、多文化的な街であるということである。メルボルン市内を歩いても欧米、アジア、南米、アフリカと世界中の飲食店、スーパーに溢れていた。特に食においては、現地の人にオーストラリア料理、メルボルン料理というものはあるのか尋ねても「ない」もしくは「しいて言うならカンガルー肉やラム肉ではないか」というほどであり、世界中の食事を楽しむことができた。しかし、スポーツにおいては、コモンウェルスの文化が強く感じられた。最も盛んなスポーツがクリケットであることをはじめ、パブのテレビではクリケットや競馬などイギリスの文化に根付いたスポーツがほとんど流されており、サッカーや野球など日本におけるメジャーなスポーツはほとんど目にするのがなかった。また、治安の良さにも驚かされた。私個人として

はほとんど初めてとなる海外経験であったため、かなり身構えて参加したのだが、渋谷や新宿などよりむしろ治安が良いのではないかと感じるほどであった。トラムから降りるとき、スマホを車内に忘れた人がおり、その人にスマホを渡すために何人も協力して呼び止めているところや年配の方に席を譲っているところを目にした。カフェなどでも英語をうまく理解できなくても嫌な態度をとるのではなく、やさしく言い直してくれたり、どこから来たのかなど何気ない会話をしてくれたり、すごく良い街だなと感じた。

メルボルン大学の印象としては、施設の規模や充実度に驚かされた。実験装置の大きさや学生が自由に使える 3D プリンターやバンドソー等の数、ジムの設備などどれも充実しており、活発に利用されていた。授業については、教室は思っていたよりも小さいところが多く、生徒の数も東工大より少ないように感じた。教授、生徒どちらもパソコンやタブレットを用いており、紙にメモしている人はほとんどいなかったことにも驚いた。また、割と一人で授業に参加している生徒も多く見られ、日本のようにグループで群れるような文化はあまりないのかもしれないと感じた。また、学生団体も活発に活動しており、気候変動やキリスト教団体など多くの団体が生徒主体となって活動しているところが多く見られた。

プログラム全体を通して、メルボルンの文化、自然、食など普段感じることのできないものに多く触れることができ、大変貴重な機会になった。現地で実際に経験し、学んだことを今後の自分のキャリアに活かせるよう努力したい。

#### システム制御系 学部4年

私にとってはこの AU 留学が初めての海外経験であった。今までコロナのせいで行けていなかったため、学士の間ではラストチャンスであり、行けて本当によかった。

メルボルンは住みやすい街だと聞いていたが、本当にその通りで、お店の人も大学の人もとてもやさしく、英語があまり達者ではない私にもとてもやさしく、英語が聞き取れないときはゆっくり話してくれる人も多かった。差別などをされることもなく、いい気分のまま帰国することができた。また、メルボルンは多くの人種が共存していることが特徴的に感じた。キャンパス外でもアジア人やアラブ人を多く見かけたし、日本料理店はじめアジアの料理店も多く見かけた。個人的にはここまで日本料理の需要が高いことに嬉しかった（実際の日本料理とはほど遠いようにも感じたが）。

いろいろな場所を観光するうえで、一番印象に残ったのは教会だ。ここまで大きく素晴らしいものは日本では見られないので圧巻であった。また、メルボルン大学内でクリスチャンの団体が主催するイベントにも何度か参加させていただいたが、大学内でここまで宗教的な活動をオープンに行っていることにかなり驚いた。本当に貴重な経験をさせていただいたように思う。

メルボルン大学の授業を受けてみて、東工大の授業とほとんど差異がないように感じた。かなり基礎的な所から教えているように感じ、日本の高等教育のレベルの高さを感じるとともに、海外の一流大学の内容についていけることが嬉しかった。ラボツアーではメルボル

ン大学の研究室を見学することができたが、これに関しては東工大よりもはるかにすごい施設が並んでいて唖然とした。

今回の留学を通して、メルボルンが住みやすい街であるとはいえ、海外で生きていく自信が身についた。この留学中、なるべくスマホに頼らず、例えば道が分からなかったら人に聞く、その店のおすすめの商品が知りたかったら店員に直接聞くなどを心がけてきた。結果的に、日常会話レベルの英語力には到底及ばないが、英会話への恐怖心がうすれ、結果的にかなり良い取り組みだったと思う。自分はもう学士4年と残る期間は少ないが、どこかで1-2か月ほどの留学を行いたいと考えているので、それに向けて貴重な経験ができた。

今回の AU メンバーに選んでいただいたことに本当に感謝しております。ありがとうございました。

### **建築学系都市・環境学コース 修士2年**

私は修士課程を終える直前にオーストラリアへの超短期留学に挑戦しました。大学・大学院では建築や都市計画の勉強を続けました。ここで学んだことは大きく二つあります。1つ目はインターネットが普及した現在、どこに何があるのかを容易に知ることは出来ますが、その場所のイメージや雰囲気は実際の空間で行動することでしか身につけません。修士課程での講義、研究室で取り組んだ防潮壁を考えるプロジェクトにおいてこのことを感じ、イメージや雰囲気を掴むためには実際に自分の足を動かすことが大切だと考えています。2つ目は、人が生活できる基準を満たしているかの数字の評価だけでなく、人がどのように感じるのかについても検討する必要があることです。最近では、AI やデジタル技術の進化によって、人がこれまでやってきたことを取って代わられるようになりましたが、機械が判断したことを正しいか判断するのは人であると思います。

留学期間は平均で 30000 歩をメンバーたちと歩きました(笑)。街中をランニングしている人、公園で友達とピクニックをしている人、赤信号でも大丈夫だと思ったら渡る人、マスクをしていない人が多いなど、オーストラリアで暮らす人の生活を目で確かめました。また、メルボルン大学では日本語の語学講義を受講しました。現在の日本で当たり前となっている話し方は海外の学生からは奇妙に見えること、日本のアニメが語学習得に大いに役立っていることを知りました。約10日間滞在しオーストラリアで暮らす人にとって大切なことは何か、オーストラリアで活かせる日本の文化や技術は何かを知ることができたと思います。

今年の3月に大学院を卒業し、4月から社会人になります。新規事業を企画する部署に所属する予定ですが、いつか海外事業にも携わりたいです。この留学をきっかけにはじめた英語のスピーキングの勉強を今後も続けていきます。今後の自分が望むキャリアを実現したいと強く志望することに繋がった留学となりました。

## 8. 資料

### 図表索引

図 1	戦争慰霊館前にて .....	5
図 2	オーストラリアの国旗の概要 .....	6
図 3	オーストラリアと日本の人口・面積の比較 .....	6
図 4	オーストラリアに日本を重ねた図 .....	7
図 5	通常の日本とオーストラリアの時差 .....	7
図 6	サマータイム時の日本とオーストラリアの時差 .....	7
図 7	オーストラリアの州と主な都市 .....	8
図 8	オーストラリアの通貨 (¢) .....	9
図 9	オーストラリアの通貨 (AUS\$) .....	9
図 10	オーストラリア国内の主要都市の平均気温 .....	12
図 11	オーストラリア国内の主要都市の降水量 .....	12
図 12	シドニー・オペラハウス .....	13
図 13	ウルル=カタ・ジュタ国立公園(エアーズロック) .....	14
図 14	グレート・バリア・リーフ .....	14
図 15	サフル大陸 .....	17
図 16	ゴールド・ラッシュ .....	18
図 17	ダグラス・モーソン .....	19
図 18	ハワード・フローリー .....	19
図 19	フランク・マクファーレン・バーネット .....	20
図 20	メルボルンの位置 .....	21
図 21	メルボルンの気候 .....	22
図 22	植物の葉にもストリート・アート .....	23
図 23	ダイソーの料金表示 .....	23
図 24	にぎり寿司 .....	24
図 25	チキンバルマ .....	25
図 26	セント・パトリック大聖堂 .....	26
図 27	ビクトリア州立図書館 .....	27
図 28	ビクトリア州議事堂 .....	27
図 29	王立展示館 (HP から引用) .....	28
図 30	Cate Blanchett .....	29
図 31	Lisa Gurrard .....	29
図 32	John Malcom Fraser .....	29
図 33	キャンパス内の建物 .....	31

図 34	Circuits and Systems の授業風景 .....	33
図 35	NIMS の実験室 .....	36
図 36	Telstra Creator Space 内 (地下) .....	36
図 37	CAREN Lab Tour の様子.....	37
図 38	Campus Tour の主催者との食事 .....	39
図 39	メルボルン市内の様子 .....	40
図 40	Night Victoria market のアフリカ料理 (左) とスペイン料理 (右) .....	40
図 41	フリートラムゾーン .....	41
図 42	いろいろなトラムの外装 (写真に収められたもの) .....	42
図 44	LUNE のクロワッサン.....	43
図 45	Seven Seeds で食べたモーニング .....	43
図 46	The Boatbuilders Yard でランチ .....	44
図 47	大学に行った初日の昼ご飯—Zaccacia—.....	44
図 48	Royal Stacks はリピートした (左 ; Double Stack、右 ; Saint) .....	45
図 49	ブライトンビーチとハンバーガー .....	45
図 50	左 ; Grilled、真ん中 ; Shanghai Street、右 ; Stokers Fine Pancakes .....	46
図 51	左 ; Stalactites Restaurant、右 ; Guzman y Gomez .....	46
図 52	Pho Bo Ga Mekong のフォーとツアー中の Fish & Chips .....	47
図 53	左 ; Dukes Coffee Roasters、真ん中 ; Market Lane、右 ; Brother Baba Budan .....	47
図 54	Koko Black の内装.....	48
図 55	ぬいぐるみ .....	49
図 56	メルボルン大学のロゴ .....	49
図 57	日本で売られていないオーストラリアの KitKat.....	50